Global Wings of Fukuoka Youth

第４回
福岡県グローバル青年の翼 2019
報告書

Contents

知事あいさつ 2
団長あいさつ 3
概要 4
団員名簿 5
第１次研修 6
第２次研修（フィールドワーク） 7
第３次研修 9
第４次研修（海外研修） 10
第５次研修 25
第６次研修（地域別実践活動） 27
団員レポート 29
事務局から一言 40
募集要項 41
Special Thanks to 42
SnapShots with Message 43

国際的な視野を持ち、地域で活躍する人財の育成を目指して

福岡県知事　小川　洋

私たちは、今、「少子高齢化、人口減少」、「AI、IoTなど最新技術による『第４次産業革命』の進展」、「『人生100年時代』の到来」など、大きな変化に直面しています。

このような中、私たち一人一人が自分らしい生き方を実現するとともに、多様な人々と共に課題を解決しながら、将来に夢や希望の持てる活力ある社会を創造してくことが重要です。

これからの福岡県、そして日本の発展を考えると、“Think globally, act locally”国際的な視野を持ち、地域で活躍をする「人財」の育成が必要です。

このため県では、躍動するアジアの現状を体感し、現地で活躍する人たちとの交流などを通じて、グローバルな視野を備えた青年リーダーを育成する「福岡県グローバル青年の翼」を実施しています。

今年度は20人の若者たちがミャンマーとマレーシアを訪問し、現地の若者たちとの交流や、現地に進出している国内企業、日本型の農業技術の普及に取り組む国際NGOの皆さんとの意見交換を行うとともに、ミャンマー人の技能実習を行っている企業やマレーシアの旅行会社などを訪問し、自ら設定した「人材育成・教育」「観光・食」をテーマに自主研究活動を行いました。

また、海外研修の前後には、アジアの現状や福岡県の歴史、途上国に進出している県内企業や、新たな在留資格である特定技能について学んだほか、団員自らが企画し、外国人材を受け入れている企業や国内外から観光客を誘致している公益財団法人を訪問するなど、フィールドワークにも取り組みました。

これらの経験は、団員の皆さんにとって貴重な体験であり、かけがえのない財産になったことと思います。皆さんが、この「福岡県グローバル青年の翼」で学んだことを糧に、地域の青年リーダーとして活躍されることを心から期待しています。

県では引き続き、未来を担う「人財」の育成に取り組んでまいります。皆さまのご理解、ご協力をお願いします。

最後に、本事業の実施に当たり、ご尽力いただいた福岡県グローバル青年の翼実行委員会をはじめとする関係の皆さまに心から感謝申し上げます。

学び、体感し、交流した経験と絆を財産に 今後の成長と活躍を期待します

団長　私学振興・青少年育成局長　野田　律子

令和元年度「福岡県グローバル青年の翼」は、9月上旬の第1次研修から始まり、テーマ別の第2次研修、渡航直前の第3次研修を経て、11月3日から10日までの7泊8日の日程で、ミャンマーとマレーシアの2か国を訪問しました。

ミャンマーは、アジア最後のフロンティアと称され、経済発展が期待される国です。まず、パコック県のオイスカ農村開発研修センターを訪問、現地農業を体験し、ミャンマー中部の痩せた乾燥大地が、長年の日本の技術協力により緑豊かな農地に変わっていることを体感しました。さらに祖国ミャンマーの未来のために農業技術を学ぶ青年達との共同生活や近隣の村の集落と小学校の訪問を通じ、団員の皆さんは異文化の壁を越えた友好関係を築くことができました。ヤンゴン市では、ミャンマー人の技能実習等を行っている企業への訪問、厳しい環境下で懸命に学ぶ子ども達との交流、ミャンマーで活躍されている県人会などの方々との意見交換等を通じ、大きな刺激を受けました。また、ヤンゴン市郊外にある本県出身戦没者を弔う「福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑」への献花を通じて、あらためて平和の尊さを感じることができました。

次に訪問したマレーシアは、多くの民族・文化・宗教が共生する多民族国家です。首都クアラルンプールでは、人種や言語が異なる子ども達が共に学ぶ華人系小学校を訪問し、日本の教育現場との違いを体感するとともに、現地の子ども達と触れ合うことができました。また、イスラム社会の中で奮闘する日本企業のハラール戦略の見聞等、非常に高いレベルの視察を実施することができました。

事前の国内研修で、福岡県を拠点に世界で活躍する方々から講義を受け、団員達自ら企画した企業や教育現場での自主研究を行っていたからこそ、訪問先で深く掘り下げた質疑を行い、より学びを深めることができたのではないでしょうか。

ミャンマーとマレーシアは経済的な発展状況は対象的な国でしたが、地域のために活動する現地の方たちと交流し、その情熱に触れ、感銘と刺激を受け、多くのことを経験する貴重な機会であったと思います。

最後に、半年に及ぶ研修を成し遂げたことは、団員の皆さんにとって大きな自信になるとともに、一緒に頑張った仲間との絆は、これからの人生にとってかけがえのない財産になることと思います。この研修を通して学び、体感し、多くの方たちと交流した経験を活かし、皆さんがさらに成長し、それぞれの地域や職場で活躍されることを心より期待しています。

第4回 福岡県グローバル青年の翼（2019） ―――― 概要

1　趣旨・目的

県内青年に、世界（アジア）を舞台に県内の企業や自治体が活躍している現状を体感、認識させることで、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核的存在として地域で活躍できる人財を育成する。

2　概要

(1) 団　　員　20名

(2) 研修内容

① 第1次研修（宿泊） 9月7日（土）～8日（日）	郷土の歴史・県内企業の海外展開・国際協力活動・県の施策等についての講義等
② 第2次研修（フィールドワーク） ①と③の間の任意の日	海外訪問先に関連する県内企業・団体等の視察
③ 第3次研修（宿泊） 10月19日（土）～20日（日）	訪問国及び訪問先に関する講義・海外視察先選定・英語スピーチ指導等
④ 第4次研修（海外研修） 11月3日（日）～10日（日）	現地企業や教育機関、文化施設の視察、現地で活躍する日本人との交流等
⑤ 第5次研修（宿泊） 12月7日（土）～8日（日）	海外研修レビュー・NPO法人活動講義・事後フィールドワーク企画等
⑥ 第6次研修（フィールドワーク） ⑤から1月末まで	海外研修を受けての県内実践活動

(3) 海外研修　日　時　令和元年11月3日（日）～10日（日）　7泊8日
訪問先　マレーシア（クアラルンプール）、ミャンマー（ヤンゴン、バガン、パコック）

(4) 参加資格　平成31年4月1日現在で、満18歳以上35歳以下の県内居住者
（企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属・在籍する者で、国際的視野を身につけ企業・団体等の中核となって活躍する青年リーダーを目指す者）

(5) 実施主体　福岡県グローバル青年の翼実行委員会
（福岡県、福岡県青少年団体連絡協議会、（公社）福岡県青少年育成県民会議、（公財）福岡県国際交流センター、（公財）オイスカ西日本研修センター、NPO法人ふくおかNPOセンター、福岡県青年の会、JETRO（日本貿易振興機構福岡貿易情報センター）

第4回 福岡県グローバル青年の翼（2019） ― 団員名簿（生活班別）

班	氏名	所属・職業		役割	テーマ別
1班	伊藤（いとう） 雄太（ゆうた）	学生	北九州市立大学	記録／報告書編集	人材育成・教育
	梅野（うめの） 莉子（りこ）	学生	福岡女学院大学	企画	観光・食
	久保田（くぼた） 篤（あつし）	学生	九州大学大学院	企画	人材育成・教育
	坂口（さかぐち） 至（いたる）	社会人	タカ食品工業株式会社	サブリーダー	観光・食
	立石（たていし） 知里（ちさと）	社会人	株式会社福岡銀行	記録／報告書編集	観光・食
	平野（ひらの） 佑花（ゆうか）	学生	九州大学	リーダー	観光・食
2班	新谷（あらたに） 文都（あやと）	学生	福岡大学	記録／報告書編集	人材育成・教育
	大屋（おおや） 歩夢（あゆむ）	学生	九州工業大学	記録／報告書編集	観光・食
	織田（おだ） 孝徳（たかのり）	社会人	田中藍株式会社	リーダー	観光・食
	田代（たしろ） 公貴（こうき）	社会人	九鉄工業株式会社	企画	人材育成・教育
	田中（たなか） 佳倫（かりん）	社会人	大刀洗町役場	記録／報告書編集	人材育成・教育
	永田（ながた） 佑衣（ゆい）	学生	九州大学	企画	人材育成・教育
	馬場（ばば） ひなた	学生	筑紫女学園大学	サブリーダー	人材育成・教育
3班	有吉（ありよし） 美月（みづき）	学生	福岡女学院大学	企画	観光・食
	石井（いしい） 敬（ひろし）	社会人	行橋市役所	記録／報告書編集	観光・食
	鎌田（かまだ） 拓（たく）	社会人	九鉄工業株式会社	企画	観光・食
	佐々木（ささき） 大介（だいすけ）	社会人	杉村包装資材株式会社	記録／報告書編集	観光・食
	鳥江（とりえ） 徳子（のりこ）	社会人	株式会社ヨシックス	リーダー	観光・食
	原田（はらだ） 群士（ぐんじ）	学生	北九州市立大学	サブリーダー	人材育成・教育
	宮本（みやもと） 麻希（まき）	学生	九州大学	記録／報告書編集	人材育成・教育

第1次研修

初めて出会う仲間、新しい環境、未知の世界へ新たな一歩を踏み出す！

於：福岡県立社会教育総合センター　9月7日(土)～9月8日(日)

初対面の人が集まり緊張感の漂った研修室。期待より不安が勝る雰囲気を感じつつも、それぞれの思いを胸に動き始める。

初日の午前は、日本貿易振興機構アジア大洋州課の原知輝様より「マレーシアとアセアンの概要について」、田中藍株式会社取締役専務の田中克明様より「グローバル戦略と人材育成について」と題した講義をしていただいた。原様からは、ASEANを経済的な面から見た発展と今後の開発や、海外研修にて訪問するマレーシアの「今」について学んだ。また、田中様からは、日本企業の海外展開に関する動向、人口や働き方から考える生産性の向上方法について学んだ。

午後からは、中村学園大学教育学部教授の占部賢志様より「世界の中の日本～グローバル・ヒストリーの視点から～」、公益社団法人福岡県観光連盟観光推進プロデューサーの豊島茂様より「九州・福岡県の観光動向」と題してそれぞれ講義をしていただいた。占部様の講義では、世界と深くつながった日本の偉人を例とし、世界の視点に立った日本について鑑みた。豊島様からは、観光業から見た地域経済の発展、そして九州・福岡県の観光業の今後の可能性について学んだ。

1日目の講義が瞬く間に終わり、その後は生活班毎に、ミャンマーで行われる夕食交流会の企画について話し合った。まだ見ぬ仲間との交流に、みんな心を躍らせているようだった。1日目の夜には、県職員の方々を含めた団員全員での懇親会が開かれた。各自の個性的な自己紹介により、お互いに興味、関心を持つことができ、懇親会は大いに盛り上がった。

2日目の午前は、ビジネスデザインラボ代表の神田橋幸治様より「ベンチャー支援の現場から見た、福岡地域の可能性」について、グローバルイノベーション事業協同組合専務理事の徳丸順一様より「外国人の日本在留資格と新しい資格「特定技能」の制度と生活について」と題した講義をしていただいた。神田橋様からは、産学官民が一体となり福岡地域をより発展させていく中には、多岐にわたる分野での飛躍が期待されていることを学んだ。徳丸様からは、外国人の日本在留資格とそれによる生活の苦しさや困難、特定技能を始めとする新しい支援の形を学んだ。

午後の講義では、中村学園大学流通科学部准教授の中村芳生様より「食の多様性からみたハラール」と題した講義をしていただいた。中村様からは、日本で身近に感じることのできないハラールの知識と、食に関するイスラム教を学んだ。

その後は、テーマ別班に分かれ、第2次研修の訪問先の企画、検討を行った。各自が学びたいことを議論し合っているうちに論点からずれてしまうなど、多少苦戦したものの各班で意見をまとめることができた。

こうして2日間にわたる研修は瞬く間に終了した。新たな仲間や知識との出会いにより、これからも賑やかな研修になっていくと思える初めの1歩であった。

（文責：伊藤　雄太）

講義名・講師		
・「マレーシアとアセアンの概要について」	原　知　輝	日本貿易振興機構アジア大洋州課
・「グローバル戦略と人材育成について」	田　中　克　明	田中藍株式会社　取締役　専務執行役員
・「世界の中の日本～グローバル・ヒストリーの視点から～」	占　部　賢　志	中村学園大学　教育学部教授
・「九州・福岡県の観光動向」	豊　島　茂	(公社)福岡県観光連盟　観光推進プロデューサー
・「ベンチャー支援の現場から見た、福岡地域の可能性」	神田橋　幸　治	ビジネスデザインラボ代表
・「外国人の日本在留資格と新しい資格「特定技能」の制度と生活について」	徳　丸　順　一	グローバルイノベーション事業協同組合　専務理事
・「食の多様性からみたハラール」	中　村　芳　生	中村学園大学　流通科学部准教授

団員が対面し初めての講義

豊島様の講義にて意見を述べる団員

徳丸様との名刺交換

第2次研修について班内で議論

第2次研修
フィールドワーク

〔人材育成・教育チーム〕

日本の教育・人材育成の現状を知る

～小学校の外国語教育及び外国人人材の送出し・受入れ機関の訪問を通じて～

株式会社ミカサ　10月2日(水)／福岡市立那珂小学校　10月16日(水)

現在、グローバル化に伴い企業では、外国人労働者の受入れ数が増加し、また学校教育現場では、2020年度より小学3年生から英語の体験型学習が始まり、5年生から英語が教科にされるなど多くの変化が見られる。

そこで、人材育成・教育チームでは、企業や学校に訪問し、アンケート調査などを通して、現状を知ることにした。

①株式会社ミカサ

株式会社ミカサは、環境整備事業やビルメンテナンス事業などを主に行い、「社会貢献」を理念として活動している企業である。今回は、ベトナム人実習生の受入れを行った経緯や実情、また、技能実習生本人から直接話を伺うことができた。

まず、受入れの経緯については、人手不足が大きな理由のようだった。また、実情について人材育成面では、技能実習の制度上、1年目で試験に合格しなければ強制帰国となるため、仕事と日本語の両方の教育に力を入れているとのことだった。また、生活面では、生活指導員による身の回りの世話や、月に2回程度お祭りや地域の教室への参加など、しっかりとした信頼関係を築くことに力を入れていた。

以上の話から実習生はかなり大変なように思ったが、ベトナム人実習生に直接話を聞くと「日本語は大変だが、将来は日本語の先生になりたい」という考えを持っており、意欲的に勉強をしているとのことだった。生活指導員が身の回りの世話をしてくれるため、とても感謝している様子だった。

株式会社ミカサでは、会社と実習生との間でしっかりとした信頼関係が築けるように仕事と生活の両面のサポートに力を注いでいることがわかった。

②福岡市立那珂小学校

博多区にある那珂小学校は、福岡市から外国語の重点配置校の1つとして指定されており、1年生から外国語教育が行われている。その中で、私たちは3年生と5年生の外国語授業を見学させていただいた。授業は、音楽に合わせて英文や英単語を読む、ゲーム形式で英語に触れるなど体験式で行われていた。

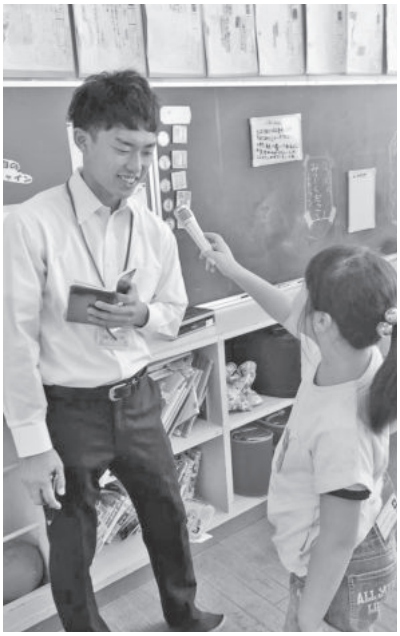
見学して一番驚いたことは、授業の最後に今日は何を学んだのか、友達の良かったところなど授業のフィードバックを感想ノートに書いたり、発表したりしていた点である。感想の発表などを通して「主体的・対話的で深い学び」がしっかりと行われており、友達に褒めてもらうことで学習意欲が増し、自分の可能性を広げる機会にも繋がるように思えた。

また、訪問時に行ったアンケートでは「授業外で、児童が発話することが増えた」との意見があり、上手くいっているように見えた。しかし、外国語の教科化により評価の付け方が難しいことや教員自身の英語力を高める必要があることなど、課題が多いのが現状であった。

感想

海外の企業、学校ではどのような人材育成・教育が行われているのか、今回のフィールドワークをしっかりと踏まえ、学習していきたい。

（文責：新谷　文都）


児童から英語でインタビューを受ける団員

生活指導員と共に実習生が日本文化と触れ合う様子

株式会社ミカサ様から説明を受ける団員

個人でフィードバックを行い
感想ノートに記入している様子

第2次研修
フィールドワーク

〔食・観光チーム〕

リピーターを増やす取組みとハラール対応

福岡観光コンベンションビューロー　9月25日(水)／極味や 西新店　9月26日(木)

食・観光チームでは、フィールドワークを通して、外国人観光客のリピーターを増やすための国内と海外における取組みを比較し、私たちがどのようなことを行うべきか調査することにした。

①福岡観光コンベンションビューロー

マーケティングマネージャーの西山健太郎様と観光戦略係長の森俊宏様に話を伺った。まず、リピーターを増やす取組みについては、SNSや「よかナビ観光サイト」の利用、コンベンションに乗じたアピールなどでリピーターの自然増加を狙っており、客単価を上げることを重視しているとのことだった。外国人にクルーズ船でのナイトタイムエコノミーやガイド雇用などにお金を使ってもらい、外国人の受入れについて地元住民の合意形成に繋げる考えである。また、九州全体で連携をとることで、福岡県を知らない外国人観光客を呼び込むことができる。そして、国別の政治、経済事情を把握することで1か国頼りの集客を防ぐことに繋がる。

また、国別でニーズに応じた工夫を凝らしている。例えば、韓国の特に若い女性はカフェやEU、アメリカは歴史的建造物、香港やフランスはアニメといったように国によりニーズが大きく異なる。様々なニーズに対応できるよう食、買い物、景観地などの分野別で魅力を作り、情報発信している。

次に、外国人観光客の宗教について伺ったところ、飲食物の対応策が2つあるとのことだった。 1つ目は、テーマパークや球場などの飲食物の持ち込みが禁止されている施設に、ベジタリアン向けやハラール対応の食事を準備することだった。 2つ目は、飲食店ごとに説明会や勉強会を開き、外国人観光客に柔軟な対応ができるようにすることだ。海外には食文化や食習慣、宗教等により特徴的な食品や料理が多数存在しており、これを食の多様性(フードダイバーシティ)という。フードダイバーシティ対応を行うことで、日本のおもてなしの心に繋がると考えているそうだ。

②極味や　西新店

店長の上原昌也様に話を伺った。ハラールメディアジャパンより話をもちかけられたことをきっかけに、2019年2月22日に世界で初めてハラール対応のもつ鍋の提供を始めた。ハラールもつ鍋は、イスラムの教義に則った屠殺方法で処理された牛もつを使用している。

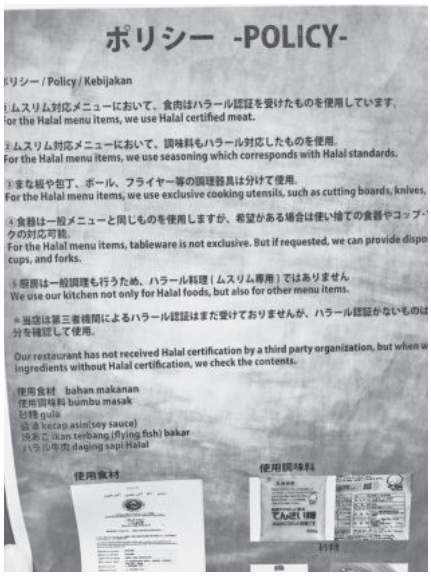
お店では、外国人観光客への対応として、原材料の表示や多言語対応のメニュー表などを準備している。準備に際し、原材料の代替品を探すのが大変だったそうだ。今後は「極味やハンバーグ店」でのハラール対応の展開や、スイーツメニューの追加を検討しているそうだ。県内にはハラール料理店が14店舗しかないが、情報発信を行うことで店舗や来店者が、今後増えるだろうと思う。

感想

今回の企業訪問で、受け入れる側の日本人と訪問する側の外国人観光客、両方の立場から物事を考えられるようになりたいと思った。今後の研修では、国境を越え、文化を越え、どのように諸外国と関わるべきか考えながら、現地の声を聞き、双方の発展につながるものを吸収したい。

(文責：有吉　美月)

福岡観光コンベンションビューロー
西山様と森様との対談



原材料表示カード

ハラール対応のもつ鍋

ムスリム対応メニュー表

第3次研修

ミャンマー・マレーシアの現状を学習及び海外研修に向け最後の準備

於：福岡県立社会教育総合センター　10月19日(土)～10月20日(日)

第2次研修のテーマ別フィールドワークを経て、10月19日(土)～20日(日)に第3次研修が行われた。

まず、西田精麦株式会社の長根寿陽様より「SDGsの達成を目指した、ミャンマーでの農業バリューチェーンの構築に向けた取り組み」についての講義をしていただいた。ミャンマーは広大な土地を有するため、その地にあった作物を育てる必要性があることや、日本及びASEANの中では比較的働き盛りの人口が多いことを学んだ。現在、西田精麦株式会社で課題としているミャンマーの物流ネットワークの未構築、一次加工技術の不足、品質管理の低さを改善し、農業分野がどのように発展していくのか、今後の動向に注目していきたい。

続いて公益財団法人オイスカ本部の藤井啓介様より「ミャンマーでのオイスカ活動について」の講義をしていただいた。オイスカは1961年に創設され、1997年にミャンマーのパコック市に研修センターを開所した。研修生はミャンマー全土から集まり、有機農業、畜産、食品加工等の技能を身に付けたのち、出身地に戻り、農村開発の中心となって出身地のために尽力する。その他、オイスカの地域開発事業、環境保全事業の20年間の実績を聞き、現地を視察し、歴史を感じてみたいと考えている。

初日の最後は、北九州市立大学の篠崎香織様より「マレーシアの歴史・民族・宗教について」の講義をしていただいた。日本では、信仰している人がほとんどいないイスラム教には「高い理想と強い意志を持った人は立派に人として正しい道を生きられる」という戒律があることや、マレーシア内では民族政治が5つに分かれていることなど、日本とのあまりの違いに驚いた。実際にマレーシアを訪れた際には5つの種族の隔たりや圧力をイスラム教内でどのように同調しているのか聞きたいと考えている。

2日目は、IT&IP Strategy Advisory GroupのAldo Bloise様・みずトランスコーポレーションの水谷みずほ様より「海外から見た福岡の魅力と課題」の講義と「英語スピーチ指導」を行っていただいた。福岡は、諸外国からのアクセスと日本国内の移動効率が良く、また若年層が多い都市であるため、福岡の魅力向上に「challenge」することで、より魅力のある都市に発展する可能性があることを学んだ。また、英語スピーチ指導では、「自信を持ち、ジェスチャーを加えながら話すと相手の好感を得やすい」というアドバイスをいただいた。

その後、第2次研修のフィールドワークの成果発表と結団式が行われた。成果発表では各チームの学びを共有し、どのようにして第4次研修以降に活かせるかを考えた。結団式では、団員1人ひとりに団員証が授与され、海外研修で多くの知識・経験が得られるよう誓った。

（文責：織田　孝徳、永田　佑衣）

講義名・講師

- 「SDG sの達成を目指した、ミャンマーでの農業バリューチェーンの構築に向けた取り組み」・・・・ 長　根　寿　陽　西田精麦㈱　新規事業推進室　室長
- 「ミャンマーでのオイスカ活動について」・・・・・・・・ 藤　井　啓　介　（公財）オイスカ　海外事業部海外開発協力担当課長
- 「マレーシアの歴史・民族・宗教について」・・・・・・・ 篠　崎　香　織　北九州市立大学　外国語学部　教授
- 「海外から見た福岡の魅力と課題」・・・・・・・・・・ Aldo Bloise（アルド・ブロイゼ）　IT&IP Strategy Advisory
- 「英語スピーチ指導」・・・・・・・・・・・・・・・・・ 水　谷　みずほ　みずトランスコーポレーション

オイスカ東京本部の藤井啓介様

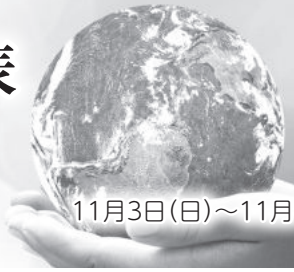
テーマ別発表打ち合わせ中

Aldo Bloise様と水谷みずほ様

結団式にて石井さんが決意を述べた

第4次研修

第4次研修（海外研修）　日程表



11月3日（日）～11月10日（日）

日程		場所	時刻	内容
DAY 1	11月3日 SUN	福岡空港	8:45	国際線　2階
		福岡発	11:40	TG-649
		バンコク着	15:40	
		バンコク発	18:05	TG-305
		ヤンゴン着	18:50	
				ヤンゴン泊
DAY2	11月4日 MON	ヤンゴン発	7:00	7Y-121
		ニャンウー着	8:20	
		エサジョ着	午前・午後	○現地の村や小学校訪問など
				○オイスカ研修センター視察、現地研修生との意見交換
			夜	○オイスカ研修センターでの夕食交流会
				研修センター泊
DAY 3	11月5日 TUE	エサジョ	早朝	○朝礼参加
				○研修センター内で研修生たちと農作業体験
				○研修センター近郊の町（パコック）視察
			午後	○バガン遺跡群見学
		ニャンウー発	18:30	K7-207
		ヤンゴン着	20:00	
				ヤンゴン泊
DAY4	11月6日 WED	ヤンゴン	8:30	○福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑献花
			10:00	○Blessing Intertrade Co.,Ltd.（縫製工場）視察
			13:30	○僧院学校（Nawaratt僧院）訪問。
			18:30	○ミャンマータ食交流会
				ヤンゴン泊
DAY5	11月7日 THU	ヤンゴン	9:00	○Japan SAT Consulting Co.,Ltd.（株式会社J-SAT）視察
			11:00	○ボージョー・アウンサン・マーケット視察
		ヤンゴン発	16:10	MH-743
		クアラルンプール着	20:25	
				クアラルンプール泊
DAY6	11月8日 FRI	クアラルンプール	8:00	○華人系小学校　SJK（C）Kepong1訪問
			13:30	○マレーシアヤクルト工場視察
			16:30	○AppleVacation&Conventions（旅行会社）視察
			18:00	○J's Gate Dining（日系レストラン集合施設）視察
			18:30	○マレーシアタ食交流会
				クアラルンプール泊
DAY7	11月9日 SAT	クアラルンプール	終日	○クアラルンプール市内・近郊視察 バトゥ洞窟、セントラルマーケット、独立広場、KLタワー、プトラジャヤなど
		クアラルンプール発	21:05	TG-418
		バンコク着	22:10	
				機内泊
DAY 8	11月10日 SUN	バンコク発	1:00	TG-648
		福岡着	8:10	
				着後、解散

第4次研修

海外研修の幕開け

出発式&移動（福岡→バンコク→ヤンゴン） 11月3日(日)

9月から始まった3度に渡る研修を終え、ついに私たちは海外研修の日を迎えた。8時半の集合時間に合わせ、朝早くから、団員が福岡空港の国際線に1人、2人と集まってきた。1ヶ月ぶりの団員との再会はとてもうれしく感じた。周りを見渡すと、談笑する団員、忘れ物をチェックする団員、しおりを確認する団員、集合までの時間を団員は思い思いに過ごしていた。集合時間になり、団長の挨拶から私たちの海外研修の全てが始まった。一人ひとりの期待と不安が一気に膨らむ瞬間だった。そして副団長の挨拶を機に、福岡県の代表として研修に行くという意識も芽生え、待合室には緊張感が流れた。

出発式が終わり集合写真を撮った私たちは搭乗手続きを終え、県職員の方々に見送られながら、ミャンマー行きの飛行機に乗り込んだ。乗り継ぎのため、私たちが訪れたのはタイのバンコク国際空港だった。6時間弱のフライトにより疲れを見せていた団員も、とても煌びやかで壮大な空港に目を輝かせていた。1時間にも満たない滞在ではあったが、団員たちは左右に立ち並ぶブランド店や様々な種類のお土産品、多種多様なレストランを回り、とても楽しんでいた。空港でのひと時を終えた私たちは夜のタイを出発した。そしてついに、アジアの最果てであるミャンマーにたどり着いた。空港を出た瞬間、私たちはここが日本ではないことに改めて気付かされた。鳴り止まないクラクション、目の前を勢いよく通り過ぎる車、普段とは違う光景に少し圧倒されながら私たちはバスへと移動した。

そんな私たちを出迎えてくれたのは桜観光のガイドであるゾウさんとオンマーさんだった。オンマーさんは、とても無邪気な笑顔と流暢な日本語でミャンマーの簡単な概要を教えてくれた。話を聞いているうちに、観光バスはヤンゴン市内のスーパーマーケットに到着した。日本には、なかなか置いていない食べ物から、馴染みのある日本のお菓子まで幅広い商品が置かれていた。各自がホテルで夜食用などのために、様々な商品を興味本位で手に取っていた。

マーケットでの買い物を終え、私たちが向かったのは、ヤンゴン市内にあるレストランだった。そこでは、ミャンマーで一番の人気を誇るチキンカレーをはじめ、多くのミャンマー料理が提供された。お米はもちろんのこと、日本とは違う料理の味付けや匂いに、はじめは苦戦する団員もいた。レストランを後にした私たちは、宿泊するホテルへと向かった。時間がすでに11時を回っており、団員の顔には疲れが見られた。しかし、明日は4時半起き。初日から今回の研修のスケジュールのハードさを実感しながら、その一方で、明日のオイスカ研修センターを楽しみにしながら私たちは眠りについた。

（文責：原田　群士）

出発式での団長の挨拶

タイ空港を満喫する団員

出発前の集合写真

ヤンゴン料理

第4次研修

未開の地「ミャンマー」へ、そこで団員を待ち受けていたものとは…

ミャンマー／移動（ヤンゴン→バガン）・オイスカ研修センター　11月4日（月）

5時半にホテルを出発し、専用バスでヤンゴン空港へ。眠たい目を擦りながら、バス内で用意してくださったパンやバナナなどの朝食をありがたく頂き、海外研修の2日目がスタートした。バスに乗る頃はまだ暗かった外の景色も、空港へ着く頃には明るい日差しが私たちを照らし始めていた。移動はまだ続く。

ヤンゴン空港からニャンウー空港へは、70人～80人乗りほどのプロペラ機での移動だ。初めてのプロペラ機に少し不安を抱きながら機体へ乗り込んだ。途中、手荷物検査で夕食交流会に使うガムテープがなぜか没収されそうになるという小さなトラブルがあったり、プロペラ機の揺れが予想以上に大きくてドキドキするシーンがあったりしたものの、無事にニャンウー空港へ到着した。

その後、専用バスでオイスカ研修センターへ向かった。プロペラ機を降りた時から、その目に飛び込んできた景色は福岡と全く異なるものだった。周りに高い建物は見当たらず、広大な農地にぽつぽつと農作業をしている人がいたり、道路のすぐそばをヤギや牛が悠々と歩いたりと、早速日本との違いを肌で感じられる瞬間だった。

バスに揺られること1時間、ようやくオイスカミャンマー農村開発研修センターに到着した。バスを降りると研修生が笑顔で挨拶をして出迎えてくれた。始めは彼らが何と言っているのか分からなかったが、後で尋ねると「ミンガラーバー」と言っていた。日本語で「こんにちは」という意味だ。コミュニケーションはまず挨拶からだ。私は必死で「ミンガラーバー」というミャンマー語を覚えた。その後、案内された宿舎もまた驚きだった。木製の簡易ベッドに蚊帳をかけて寝るタイプだ。もちろんクーラーはない。ゴキブリを見つけて悲鳴を上げる団員もいた。一方で、日本では出来ない貴重な体験に私の心はワクワクしていた。

センター内で説明を受けた後、農場、パン工場、養鶏場、養豚場を見学させていただいた。農場では様々な野菜が育てられていて、特に空芯菜が良く採れるそうだ。この地域は乾燥地帯であるため降水量が少なく、水を大切に使っている印象を受けた。土壌のpHを調整するために雨水を大きなタンクに貯めて利用しているそうだ。このセンターで作られた「あんパン」は非常に人気があるようで、日本の味が海外でも受け入れられていると感じた。他にも、まさに卵を産もうとしている鶏と触れ合ったり、大小様々な豚を間近に見たりと、食の大切さを改めて感じた瞬間だった。

研修センター内を説明していただいたオイスカの皆さんは上手な日本語で丁寧に案内してくれて、私たちは嬉しさと喜びに満ち溢れた。いつの間にか私たちは、これから待ち受けるミャンマー人との交流や体験がワクワクで待ちきれなくなっていた。ミャンマー人一人ひとりの「おもてなし」の心が団員の不安感・緊張感をワクワクへと変えていったのだ。

（文責：久保田　篤）

プロペラ機でバガンへ移動

日本－ミャンマー友好の碑

オイスカ研修センターにて歓迎メッセージ

センター内で収穫されたオイスカ米

付近の学校の子どもたちと触れ合う様子

養豚場の子豚の様子

第4次研修

現地の村やオイスカ研修生との交流を通して

ミャンマー／村の小学校・オイスカ研修センター（夕食交流会） 11月4日(月)

村の小学校と機織り見学

トラックの荷台に乗り、オイスカ研修センターからSin Tant Nar Villageへ移動した。現地では当たり前の移動方法だろうが、初めての経験に団員たちはとても盛り上がった。到着すると数え切れないほど大勢の住民から歓迎を受け、村長の挨拶で私たちの訪問が一大イベントになっていると聞きとても驚いた。

私たちが案内された小学校(Sin Tant Nar Primary School)では、教室に5つ程の小さなテーブルが置いてあり、給食が並べられていた。その日の献立は、カシューナッツや海苔を揚げたもの、スイカ、バナナなどだった。子どもたちと写真を撮るなどして、わずかながら交流できたことが嬉しかった。

次に、村の主な収入源となっている機織りの作業場を見学した。私たちと変わらない年齢の女性が、手織り機でミャンマーの伝統衣装「ロンジー」をとても慣れた様子で織っていた。作業場付近は女性が多く、彼女たちのコミュニティの場になっているようだった。帰り際、彼女たちと「別れるのが悲しい」とジェスチャーで、お互いの気持ちを表現し合った。

天然化粧品「タナカ」体験

研修センターに戻り、男性はミャンマーの国技「チンロン」、女性は伝統化粧品「タナカ」の体験をした。顔にタナカを塗ったオイスカ研修生の女性たちが「タナカ」と呼ばれる木を持って待ってくれていた。「タナカ」はミャンマーで使用されている天然の化粧品で、日焼け止めの効果があるそうだ。慣れた手つきで石版に少しずつ水を加えながらタナカの木を擦り、私たちの頬や額に塗ってくれた。団員の中には、猫のマークを描いてもらっている子もいた。

ミャンマーの文化に直接触れることによって、異文化を知る経験を得たと同時に、現地のオイスカ研修生とのコミュニケーションをとるきっかけとなった。

夕食交流会

夕方からオイスカのスタッフや研修生が準備してくれた交流会が行われた。団員たちのほとんどが、訪問した村で購入したロンジーを着用し、参加していた。研修生と団員とが交互に座り、乾杯後はそれぞれ会話を楽しみながら交流を深めた。しばらくして、研修生によるミャンマーの伝統的な踊りが披露された。また、団員からは、障害物競争や色鬼などの出し物を行った。交流会の終盤には、研修生と団員が一緒に踊り、完全に打ち解け合っていた。お互いの文化などを体験し合うことで、団員と研修生との距離がより近くなった。

感想

この経験で私が感じたことは、言葉の壁により気持ちが20%しか伝わらなかったとしても、残りをどのようにして補い、100%に近づけていくかが外国人とのコミュニケーションでは重要になるということだ。そして、その手段を私たちは既にいくつか持ち合わせていて、そのことに気づけたということが、私にとって大きな「学び」である。

（文責：馬場　ひなた）

機織り作業

タナカ体験の様子

村の小学生との交流

交流会で研修生と団員が一緒にダンス

第4次研修

鎌を使った稲刈り体験、生活に密接するマーケット

ミャンマー／オイスカ研修センター（稲刈り体験）・マーケット視察　11月5日（火）

蚊帳付きのベッドで一晩を過ごし、オイスカ研修センターでの2日目を迎えた。研修センターの朝は、点呼、国旗掲揚、ラジオ体操から始まる。研修生の大きな声に刺激を受け、私たちも元気に声を出し、ラジオ体操で朝から体を動かした。

次に、朝のパッカンジのマーケットを見学した。現地のマーケットを見るのは、海外研修では初めてだった。野菜、卵、そして、魚や肉までもが、そのままの状態で道端に置かれて売り出されている光景を目にした。日本では見ることのないマーケットの様子に、私たちはとても興味深く商品を見たり、説明を受けたりした。

研修センターにもどり、朝食後は稲刈り体験をした。センタースタッフの方に、鎌の使い方や注意点を教わって作業を開始した。私自身、鎌を使った稲刈りは初体験に等しかったので、スムーズに刈ることが難しかった。しかし、作業を進めていくうちにコツをつかみはじめ、テンポよく刈り進むことができるようになった。終盤に差し掛かるころには、誰が一番刈ることができるかなど競争を始めた団員もいて、汗を流しながら稲刈りを楽しんでいる様子だった。日差しの強い中での作業であったが、日本ではなかなか経験できない作業をミャンマーという異国の地で行え、達成感に満ちていた。

稲刈り体験のあとは、オイスカ研修センターが経営するオイスカショップで休憩をした。そこでは、センターで作ったメロンパンなどが売られていた。お店の方がコーヒーをサービスで提供してくれた。甘いコーヒーは稲刈り体験で疲れた体を癒してくれた。お店の横には、木にブランコが設置されており、良い休憩をとることができた。

午前中の最後の活動として、センタースタッフの案内でパコックのマーケットを見学した。私たちが見学できたのは、市場の半分だと説明してくれたが、それでも十分大きく感じた。マーケットは、魚や肉、衣服、スパイスなど大まかに分類された区画の中で商売が行われていた。そのため、地元の方でにぎわっており、人とすれ違うのがギリギリであった。私たちは、ミャンマーのお土産もこのマーケットで買うことができた。ポーチやかご、サンダルを買ったり、鮮やかな色のうちわを買ったりしている団員もいた。また、この日は、近くの寺院がお祭りのため、マーケット内を爆音で陽気な音楽を流すトラックが走り、その周りで青年たちが音楽に合わせ踊っている姿もあり、賑やかな様子が印象的であった。

パッカンジ、パコックのマーケットに共通して感じたのは、冷蔵庫などを持たない生活の中で、現地の人にとって食料品、日用品をそろえられるマーケットの存在はとても大きいものだということである。その国の生活をのぞくことができたのは、とても貴重な体験になった。

（文責：宮本　麻希）

研修センターの早朝の様子

初めての稲刈り体験！

こんなに刈ることができました！

早朝に訪れたパッカンジのマーケット

賑わいを見せるパコックのマーケット

第4次研修

ミャンマーに根付く仏教と伝統を肌で感じて

ミャンマー／バガン遺跡群＆移動（バガン→ヤンゴン） 11月5日(火)

1.バガン遺跡群の見学

ミャンマー滞在2日目、この日午後より私たちは世界三大仏教遺跡の一つと称されるバガンへ向かった。バガンは11世紀頃に栄えたバガン王朝の都であり、当時建てられたパゴダと呼ばれる仏塔や寺院が今も3000基以上存在している。非常に数多くのパゴダや寺院があり、建立当時を思わせるような金箔を張り巡らせた豪華絢爛なパゴダもあれば、建物素地の赤茶色のレンガがむき出しになった寺院もあるなど様々であった。

2019年7月にバガン遺跡群は世界遺産に登録された。これはミャンマーでは2件目の世界遺産登録である。その観光資源を狙い、ホテルの乱立や近隣住民の生活とどのように両立させるかが問題となっている。宗教的、文化的価値を保ちながら観光資源を成立させるという面では、近年世界遺産に登録された宗像大社群にも共通するものがあり、私たち福岡県民にとっても身近に感じるものであった。

2.バガン伝統漆器工房

次に向かったのは、バガン漆器の工房である。バガンの漆器製法は、14世紀から18世紀頃伝来し、今も当時から伝わる伝統的技法を用いた漆器生産が盛んに行われている。バガン漆器は竹ひごで素体を作り、これに何回も漆を塗り重ねる。その後表面に細かな紋様を彫り、染料の漆を流し込み、色鮮やかな漆器を完成させる。一つの漆器を完成させるのに半年から1年かかり、時間をかければかけるほど長持ちする漆器が作れるのだそうだ。訪れた工房では約70人の地元の職人の方々が働いていた。ミャンマーでは古くから高級漆器を所持することが社会的ステータスとされ、国内の政府要人が客層になるだけでなく、工房に併設された販売所でも中国、欧米の外国人観光客が高価な漆器を買い求め来訪していた。長年受け繋いだ伝統文化が、今日ではバガンの人々の生活の支えだけでなく貴重な外貨獲得にも貢献している様を目の当たりにすることができた。

3.移動～シュエダゴン・パゴダ（ヤンゴン）へ

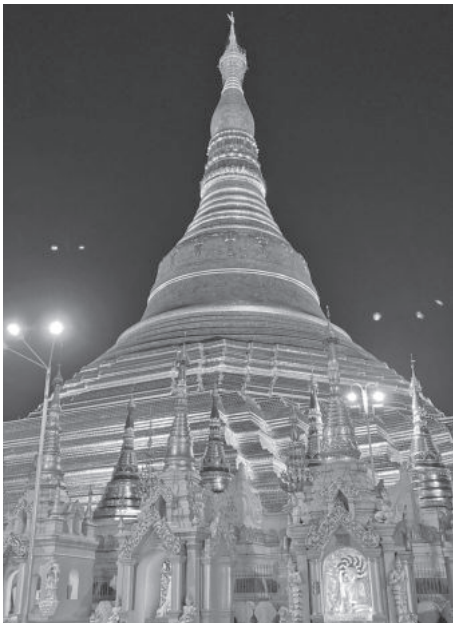
バガンからヤンゴンへ移動した後、市内にあるシュエダゴン・パゴダを見学した。ここは、仏教の開祖釈迦にまつわる遺品が納められているとされ、ミャンマー仏教の信仰の中心であり、重要な聖地とされている。私たちが訪れた際も、家族連れやカップルなど年齢性別問わず多くの人々が訪れ、熱心に参拝していた。

中心部にそびえる黄金仏塔は高さ100m以上あり、間近で見るとそのあまりの荘厳さに圧倒された。また、寺院内で特に目を引いたのが、仏塔内部で鎮座する数多の仏像群である。なんと、多くの仏像の背後には後光を表現するため、LEDによる電飾がされていたのだ。一般的に、仏像に伝統的美術価値を見出だす日本人にとって、その独特な光景はなかなか奇異に感じられるが、ミャンマーの人々の感覚から言えば、光射す後光をLED電飾でより華やかに表現し、仏様を最先端技術で進化させることが彼らにとって美徳なのだと聞いた。ミャンマー仏教が国民の生活に密接に根付き、国民と共に歩んでいる様を思わぬ形で実感したのであった。

（文責：坂口　至）

絵入りするバガン漆器の女性職人

LED電飾された仏像


シュエダゴン・パゴダ

第4次研修

戦没者慰霊碑を前に誓ったこと

ミャンマー/福岡県戦没者慰霊碑、縫製工場　11月6日(水)

かつて起きた大戦から70年以上が経過し、戦争を知る世代が減少しつつある現在、歴史上の出来事として存在感だけが残り続けている。このような認識の中で訪問した先が、戦没者慰霊碑であった。ここには、対戦時、ミャンマーで亡くなられた14万人が弔われており、東南アジア全体で約80万人いる戦没者の3割近くを占めている。このミャンマーの地がどれだけ激戦区であったかは想像に難くない。また、ミャンマーでは福岡県出身の方の戦没者が特に多いように見受けられた。

ヤンゴン市にある市場からそこまで遠くない場所に位置する慰霊碑は、市場特有の喧騒から切り取られたように非常に静かで、花や草木で彩られたどこか別の世界のように感じられた。現地で慰霊碑を管理されている方の話によると、ミャンマーの人々は日本に対し、良いイメージを持つ人が多いということだった。

戦争という一つの出来事を乗り越え、お互いに長く歩み寄り続けたことによる結果と感じている。この両国の関係維持を今後も継続していくために、現地で慰霊碑を管理されている方に御礼の挨拶を行い、慰霊碑に対しては、菊の花と線香を上げ、心から「ありがとう」と伝えた。

ミャンマーのみならず、東南アジアではマレー作戦以来、激戦が繰り広げられた。今回の戦没者慰霊碑への参拝を通じて、東南アジアの国々という大きな視点から、国と国、国と地域、人と人といった小さな接点へとお互いの文化や歴史を理解し合える関係を築き上げ、育んでいこうと心に誓った。

その後、縫製工場を視察した。縫製工場に勤める玉崎氏から従業員約600人が在席していると説明を受け、日本人は玉崎氏だけだと聞き、驚きを隠せなかった。ミャンマーでは軽工業が発展してきており、日本の主要企業へ制服を輸出していることに今後の更なる成長の可能性を感じた。しかし、日本と違いインフラが整っておらず、水や電気関係の問題が工場稼働の足枷となり、発展の妨げになっていることが確認できた。従業員の採用についても、現従業員が家族や友人を引き連れて採用に至っている方法に、今の日本では決してありえない海外特有のダイナミズムを感じた。

私もミャンマーなど東南アジアに対し、今後の発展の手助け、協力できることがないか模索し、慰霊碑に眠られている功労者や縫製工場の玉崎氏のように世界で活躍したいと思った。

（文責：織田　孝徳）

戦没者慰霊碑を前に団員代表挨拶を行う団員の佐々木さん

戦没者慰霊碑を管理されている現地の方々

戦没者慰霊碑

縫製工場の様子

第4次研修

困っている子どもたちに教育という形で直接手を差し伸べるミャンマーの仏教

ミャンマー／ヤンゴン市内の僧院学校　11月6日(水)

僧院学校とは

日本では馴染みのない「僧院学校」という言葉。僧侶の元で基礎教養を身につけるという意味では寺子屋に近いのかもしれないが、その実態は少々異なる。

僧院学校の全生徒611人のうち、半数の300人程は育児放棄されたり、戦争で両親を失った子どもたちだ。また、残りの半数の生徒の中には、両親から一緒に暮らすことを拒否された子どもたちが100人程いる。生まれた家庭で生活することが困難な子ども達を養護しているという意味では、日本の「児童養護施設」に近い施設と言える。

子どもたち

子どもたちは、イスラム教を始め、様々な宗教を信仰している子がいるが、僧院学校に入学した時点で仏教徒となり、8人の僧侶と数名の教師たちの元で4年生まで学ぶ。食事は僧侶たちが集めてきた寄付によって賄われる。

また、子どもたちの中には、年齢がわからない子もおり、同じ年齢でも、それまで育った環境によって識字や計算能力には大きな差がある。そのため、学年は年齢ではなく、入学時の学力検査によって振り分けられる。見学させていただいた3年生の教室には、10歳から13歳までの子どもがいた。

様々な辛い過去を持つ子どもたちだが、僧院学校での様子からは、そういう辛さは感じられない。私たちが見学しているからというのもあるかもしれないが、子どもたちは終始笑顔だった。また、教室に飾られた子どもたちの描いた絵からも、それは感じられなかった。

授業風景

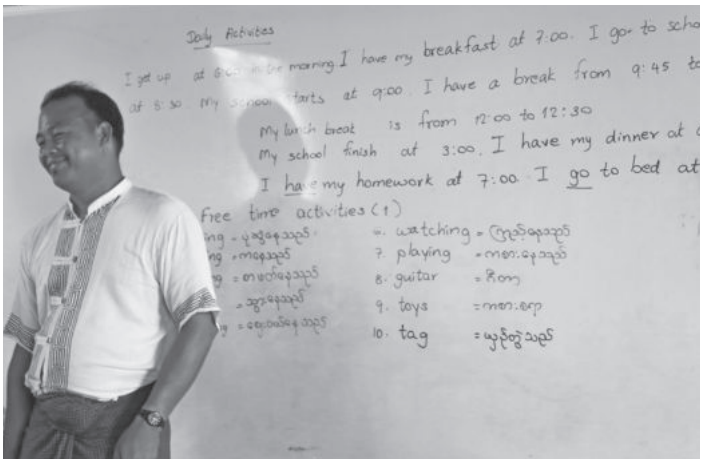
長椅子と長机が並べられた教室に先生1人と生徒40人程で授業を行う。私たちは英語、国語(ミャンマー語)、算数の授業を見学させていただいた。各授業の教科書とノートは、ほぼ全員分揃っており、最低限の環境は整っているように見えた。子どもたちは、先生のあとに続いて元気よく教科書を読み上げる。国語と算数の授業に関しては、教えている内容は日本と大差ないように感じたが、英語の授業は日本の中学2年生で学習する内容のように感じた。発展途上国の学校では読み書き計算しか行われず、日本のような先進的な授業は行われないという偏見は、直ちに改めなければならない。

これから

訪問した僧院学校では現在4学年までしか学習ができないので、5学年以降は別の学校に通うため、車で送り迎えを行わなければならない状況となっている。この状況を打開するため、高等学校相当まで学習できるよう認可を取る予定だという。また、ゆくゆくは老人ホームを併設するという目標まであるそうだ。

日本では、人の死に関わるイメージが強い「宗教」だが、ミャンマーでは、もっと具体的に困っている人々を救う役目を果たしていることを知った。

（文責：田代　公貴）



英語の授業のホワイトボード

授業の様子

第4次研修

ミャンマーの更なる発展に向け、日本人からみたミャンマー人労働者の在り方など学ぶことが多かった交流会

ミャンマー/夕食交流会（ヤンゴン） 11月6日（水）

夕食交流会

夕食交流会には、午前中に訪問した縫製工場(Blessing Intertrade Co., Ltd.)の玉崎様や翌日に企業訪問を予定している株式会社ジェイサット(Japan SAT Consulting Co., Ltd.)の森川様やミャンマー人スタッフのほか、TNY国際法律事務所の堤様、福岡市からの派遣職員の方々、ミャンマー福岡県人会や現地旅行会社のさくら観光の方々など多くの方が参加されており、会場は賑わっていた。

事前研修において、夕食交流会での自己紹介や質問を英語で行うことができるように練習していたが、参加者のほとんどが日本の方々だったので、少しほっとした。

しかし、このような交流会に参加したことがある団員がおらず、どのテーブルに行ったら良いのか、何を話せば良いのか分からず戸惑ってしまった。そのため、団員2，3人で一緒に招待者に話しかけることにし、徐々に緊張を和らげていった。

招待者の方に、ミャンマー人の働き方について伺うと「仕事は真面目だけど、体力的に辛いことや他に給料の良い企業があると、その日の内に転職を決めることもある。」、「日本人は10分前行動が当たり前だが、ミャンマーの人は当たり前でないようだ。そこは、国民性の違いなので難しいところだが、仕事とは関係ないところで良いアイディアが生まれたりすることもあるので、そこを仕事に活かしてくれればいいなぁ。」という率直な意見が聞けた。

また、さくら観光の方には、ミャンマーの観光地や私たちが訪れた場所を資料と照らし合わせながら説明していただいた。ミャンマー国内には、未だに危険地帯があるようで、ミャンマー西部の「ロヒンギャ」、東部の「ゴールデントライアングル」と呼ばれるタイとラオスに接する国境付近、北部にある中国との国境付近には紛争、内戦、薬物中毒などの問題があるという話を聞き、これから発展していくミャンマーにとって、まだまだ大きな課題が残っていると感じた。

交流会では、仕事以外にもプライベートな話題にも会話が広がり、みんなが楽しい時間を過ごすことができた。

最後は、招待者の方々と記念撮影を行い、交流会は終わりを迎えた。

感想

今回の夕食交流会で、日本では知ることのできないミャンマー人の国民性や生活習慣、ビジネスについて学ぶことができ、非常に良い経験になった。これからのミャンマーの更なる発展に期待し、学んだ事をこれから先、自分のスキルアップに繋がるよう活かしていきたいと思う。

（文責：佐々木　大介）

交流会での団員の自己紹介

参加された方々の紹介の様子

皆さんと楽しく談笑

最後は皆さんと記念撮影

第4次研修

同世代のミャンマー人と話して気づいたこと

ミャンマー／J-SAT Consulting Co.,Ltd.&移動（ヤンゴン→クアラルンプール） 11月7日（木）

J-SATグループは、代表の西垣充氏が1998年に設立し、旅行業を中心としたサネイトラベルから始まり、ミャンマー進出コンサルティング、人材紹介、視覚障がい者自立支援等、幅広い事業でミャンマーの発展に寄与している。

まず、ゼネラルマネージャーである森川氏よりJ-SATの事業やミャンマーについての話を伺った。 J-SATの企業理念は、ミャンマーの適正な発展に貢献することであり、ミャンマーの正しい情報を伝えることを大切にされている。

人材紹介事業では、ミャンマーに進出している日系企業への人材紹介、ミャンマー人へのキャリア支援等も行っている。森川氏からは、相手がどう思っているかを理解することが、海外に行くときだけでなく福岡にいながら海外の方と接するときに重要であると伺った。

この例として、ミャンマーでの食事のことが挙げられた。ミャンマーでは、1度の食事で出される量が多く、食べきれないほどである。日本では出された食事を残してしまうことへの罪悪感があり、出来るだけ食べきろうとする。一方、ミャンマーでは残ったおかずを分け与えることが徳を積む行為にあたり、よい来世を迎えることができるとされており、食事を残すことへの抵抗はないということであった。その話を聞き驚いたが、これまでのミャンマー滞在中の経験を思うと納得する話でもあった。

J-SATは、オフィスのあるサクラタワー内にJ-SAT Academyという日本語学校も設立しており、日本での就職を目指す約100名の生徒が勉強をしている。今回の訪問では、日本で働くことが決まっている6名の生徒の方と団員でグループに分かれ、いろいろな話を伺った。生徒の方々は大学を卒業された後、J-SAT Academyに入学し、1年間日本語教育を受け、介護士やエンジニアとして日本で働く予定になっている。自己紹介を受けたが、緊張しながらも聞き取りやすい日本語で話されており、日本語を学習しはじめて短期間とは思えないほどであった。

私は、エンジニアとして働く予定のチョウさんと、日本語を勉強する上で大変なことやどうして日本で働こうと思ったのかについて話をした。チョウさんは、将来ミャンマーに帰ったら、技術の発展に貢献したいと言っていた。

これから日本で働くミャンマーの方と話し、日本で働きたいと思う理由には、それぞれのこれまでの経験や環境、これからへの展望があるのだなと再認識した。私たちも福岡で外国の方とともに働く、接する機会があると思う。その時に、相手の文化や価値観を理解しながら、話していくことが大切なのだと思う。そのことを忘れずに今後行動していきたい。

J-SAT訪問後は、にぎやかなボージョー・アウンサン・マーケットを訪れ、団員それぞれでマーケット内を視察した。

「ミンガラーバー」とミャンマー語の挨拶も自然と口から出るようになってきたところで、名残惜しくもミャンマーでの研修を終え、マレーシアへ向かった。

（文責：田中　佳倫）

森川氏からの説明を聞く団員

生徒さんと近い距離で

第4次研修

小学生から3言語を学べる?学ばなければならない?という環境

マレーシア/華人系小学校訪問　11月8日(金)

生憎の天気に見舞われたものの、浴衣を着て登場した私たちを子どもたちが満面の笑みで出迎えてくれた。今回、1700人もの生徒と76人の先生のいる大きな小学校を訪問した。

マレーシアは他民族国家で、マレー系、華人系、インド系の主に3つの民族で構成される。政府の補助がある一般的な公立小学校では、マレー語で授業が行われるのに対し、今回訪れた小学校では、授業が中国語で行われる。この小学校では英語、マレー語、中国語の3言語を教えており、私たちは3つの班に分かれて授業を見学させてもらった。各言語の1週間のクラス数は、英語6クラス、マレー語8クラス、中国語10クラス(各クラス30分、小学校3年生～6年生の場合)という配分で、日本でいう国語にあたる中国語のクラス数に匹敵するほど、他言語のクラス数も行われていることに驚いた。

授業の見学が終わると、全校生徒が一堂に会し、出し物をしてくれた。太鼓でのパフォーマンスは、小学生とは思えないほどの迫力で大変感動した。私たちは、自分たちの出し物が盛り上がるか不安だったが、披露した「ドラえもん」と、英語での「幸せなら手をたたこう」の2曲に子どもたちは大いに盛り上がったため、団員みんなほっと胸をなでおろした。

生徒との交流後、先生方への質疑応答が行われた。団員からの「生徒たちが見知らぬ私たちに対して、積極的に話しかけてくれるのはなぜか?」という質問に対し、「普段から発表や演技を行い、人前で話すことに慣れさせるなど、生徒の積極性を磨く工夫をしている。」との回答をいただいた。確かに、授業を見学した際にどの授業でも生徒が前に出て堂々と発表したり、先生の問いかけに対して生徒が大きな声で返したりなど、生徒たちの積極性が見られた。

今回、マレーシアの小学校を視察して、日本の小学校でももっと人前で話したり、自分の意見を主張したりする練習を日常的に行うことで、日本人特有と言われる忖度、奥ゆかしさの文化を打ち破り、世界で活躍できる人材が増えていくのではないかと感じた。また、日本の小学校では英語がまだ基本科目として導入段階にある中、マレーシアの小学校では3言語を幼少期から学べる環境を羨ましく思った。その一方で、休み時間に生徒たちが民族、言語を分け隔てなく話している姿を見て、互いの言語を習得しなければ、日常のなにげないコミュニケーションすらとれないという大変さや言葉の持つ役割についても改めて考える良い機会となった。

(文責：永田　佑衣)

生徒が前に出て堂々と発表している様子

団員と生徒が一緒に授業を聞いている様子

生徒たちからの圧巻の太鼓パフォーマンス

団員側からの出し物の様子

第4次研修

現地展開におけるハラール認証取得の重要性や人材雇用の困難さ、民族毎に異なる販売戦略を学ぶ

マレーシア/マレーシアヤクルト工場　11月8日(金)

1.マレーシアヤクルト株式会社の概要

大久保工場長よりマレーシアヤクルトの取組みなどについて説明を受けた。

株式会社ヤクルトは、「世界中の人々の健康を守る」という企業理念により海外へとフィールドを広げ、2004年4月にマレーシアヤクルト株式会社を創業。2004年1月30日にヤクルト飲料がハラール認証機関(JAKIM)に認証された。

マレーシアヤクルトでは、乳酸飲料、医薬品、化粧品の3つを柱にマレーシア国内、シンガポール、ドバイの3カ国に販売している。コスト削減のため、容器も自前で作り、環境問題を受けストローも廃止している。容器のサイズは、「安い価格で簡単に手に入るように」という考えを原点に、小さなお子様にも飲みやすいように、また、ヤクルト菌は一度に多くの量を飲んでもお腹の中で定着しないため、小さいサイズにしている。交代制により、1日50万本の生産を行っている。

2.ハラール認証までの努力

ハラールはイスラム教で「許されたもの」、ハラームは「禁止しているもの」で、豚、アルコール等が挙げられる。マレーシアにおいてハラール認証の無い製品は販売していない。

ヤクルトがハラール認証を受けるにあたって、苦労した点は3つあるそうだ。1つ目は、ハラール認証の申請時、工場が建設中で未完成だったため認証がとれず、粘り強い交渉の結果、工場完成後、通常2ヶ月かかる審査を1ヶ月に早めていただき、2月1日の発売予定ぎりぎりに取得できたこと。2つ目は、ハラールの更新審査が急にあるため、書類の整備が大変であること。3つ目は、中華系従業員がアルコールを工場内に持ち込まないようにするため、食堂を廃止したこと。

3.民族毎に異なる販売戦略を実施

マレーシアは大きく3つの民族に分けられ、文化、言語、生活習慣が違うので、各民族に合わせた販売戦略が必要だと伺った。

中華系は論理的に判断する傾向が強く、健康志向の方が多いので、効用を伝える販売戦略が功を奏したそうだ。

一方、マレー系は感情的であり、サッカーファンが多いため、よしもとなどのタレントを起用して商品プロモーションを依頼したり、マレーシアのプロサッカーチームのスポンサーになるなどの販売戦略で製品の浸透を図った。

4.転職が当たり前の社会

工場の品質管理課の女性イスラム人は、平均3ヶ月で離職してしまうらしい。現場が暑い、給料、人間関係などが理由で辞めてしまうそうだ。マレーシアでは条件の良い職場へ転職する事(ジョブホッピング)が当たり前である事が印象に残った。

5.まとめ

ヤクルトのハラール認証取得までの努力、雇用、人材育成や販売戦略の困難さについて学ぶ事ができた。特に、ムスリムの人々にとって食の戒律は切っても切れないものであり、ハラール認証は現地展開において不可欠である事や、現地の働き方に関する考えを踏まえた雇用戦略が重要だと感じた。

(文責：石井　敬)

大久保工場長による説明の様子

乳酸飲料

医薬品

化粧品

ヤクルトマレーシアの外観

第4次研修

福岡へのインバウンドを進めるために

於：マレーシア/Apple Vacations & Conventions　11月8日(金)

Apple Vacationの概要と取組み

Apple Vacationは、1996年に設立され、現在約300名のスタッフが所属するマレーシア最大手の旅行会社である。今回はスタッフのスーザン様に話を伺った。

Apple Vacationでは、独自の宿泊先や訪問先を持っており、それが好評で観光客が増加している。日本への旅行客は、リピーターが多く、特に東京、大阪、京都の順に巡るゴールデンルートが人気である。次に北海道、その次に東北、九州といった順に人気があるそうだ。北海道の人気の理由は、マレーシアが温暖な気候のため、寒冷地ならではの食べ物やスキー、雪祭りなどのアクティビティを体験できるからだ。さらに、マレーシアでは12月に1ヶ月ほどの長期休暇があるそうで、時期がニーズに合致していることも大きな理由である。

また、日本の旅行会社と違い、Apple Vacation では旅行客のニーズが何であるかを重要としている(日本では日程が決まっているパッケージプランが多い)。そのため、旅行前に訪問先のアンケートを実施し、食べたいものや見たいものをリサーチして、プランを決めている。さらに、現地にてプランとニーズが合致していないと判断した際は、ニーズに沿うプランに変更するなど、フレキシブルに対応している。

福岡へのインバウンドを進めるためには

スーザン様の話から感じたことは、福岡県の認知度が低いことや目玉となる施設やアクティビティがないことだ。

現在、人気のある東京、大阪、京都には、スカイツリーやユニバーサル・スタジオ・ジャパン、金閣寺など日本国内でも有名な観光施設やアクティビティが豊富である。また、北海道には、ウィンタースポーツを体験できるといった強みがある。私が外国人観光客として日本を訪問した場合、滞在期間中に福岡まで足を伸ばすという選択をする可能性は低いと思う。

その中で、福岡への観光客を増やすためには、まずは他県との連携が必要であると感じた。例えば、他県にある福岡発祥の料理を出すお店などに福岡をPRするポスターを掲示することや、観光地で福岡のPR映像を流してもらうことなどである。日本を訪問する外国人観光客は、日本に関心が高いと思われるため、彼らに向けてPRすることが非常に重要であり、他県と連携してPRを行うことがインバウンドを進めるために必要なことであると思った。また、Apple Vacationに習い、観光客に柔軟に対応することや、福岡にシンボルとなるような施設を置くことも必要だと思う。

以上が、Apple Vacation訪問から私が考えた福岡へのインバウンドを進めるための対策だが、もっと広い視野で考えると別の発見や矛盾点があり、観光業は非常に難しいものであると感じた。

(文責：鎌田　拓)

旅行プランのパンフレット

Apple Vacationsスタッフへ質問している様子

掲示写真

スーザン氏へお礼の挨拶

第4次研修

マレーシアでビジネスを展開している福岡県人会の方々と交流

マレーシア/J's Gate Dining・夕食交流会　11月8日(金)

J's Gate Diningを視察後、マレーシア在住の福岡県出身者で、定期的に集まり交流をしている県人会の方々を招待し、夕食交流会を行った。交流会は、同フロア内にある「とり錦」で行われ、福岡県人会の方々とテーブルを囲んで食事や交流を楽しんだ。

J's Gate Dining

J's Gate Diningは、マレーシアのクアラルンプール市内にある大型ショッピングセンター「Lot10」内の4階に開設する日系レストランの集合施設である。フロアには、18店舗あり、和食店から居酒屋やスイーツ店など幅広いジャンルの日本の外食企業が出店していた。

フードコート内は、日本の和を表現する内装となっており、おもてなしの心や優れた食材、料理の見た目の美しさなど日本食文化を広める場所になっていた。また、来客者の9割が華人系の方達で、マレーシア在住の日本人にも多く利用されているようだ。また、マレーシアを訪れる日本人以外の観光客が利用している様子も見られた。

日本でもよく見かける「やよい軒」や若者に人気の「VITO」、抹茶専門店の「TSUJIRI」など様々なジャンルの外食企業が出店しており、マレーシアにいながら、気軽になじみの日本食を楽しむことができる施設であった。実際に「とり錦」のから揚げや卵焼きを食べたが、日本で食べているものと味も見た目も変わりなく食事を楽しむことができた。

夕食交流会を通して

私のグループは、プラスチック部品を扱う会社でマーケティングマネージャー部長として活躍されている福岡県人会の小谷美穂さんに様々な話を伺った。小谷さんは、好奇心に満ち溢れ、自分の考えや目標を強く持っており、とても生き生きされていて笑顔がすてきな印象を受けた。また、私たちの話にも丁寧に受け答えしていただき、うれしかったことを覚えている。小谷さんとの話の中で、特に印象に残ったことが2つある。

1つは、小谷さんに「マレーシアで生活する中で苦労したことは何か」と質問すると、「異文化理解だ」と言われたことだ。小谷さんの同僚が亡くなった時、マレーシアの方は別れに対してそっけなかったことに悲しさを感じたそうだ。私たち日本の文化では、ご先祖様を大切にするため、毎年お墓参りや回忌を祝う文化がある。しかし、マレーシアでは民族によって死生観に違いがあり、異文化理解の難しさを感じたそうだ。

もう1つは、「自分でしたいと思ったことは失敗を恐れず、何でも挑戦して地道に努力をすれば、自ずと認めてくれるようになる。」と言われていたことだ。小谷さんの力強い言葉に、挑戦することの大切さを改めて実感し、勇気をもらった。

最後に、幅広くグローバルにビジネスを展開されている福岡県人会の方々と交流できたことは、私たちにとって貴重な経験となった。また、県人会の方々のような福岡の誇りになりたいと強く思った。

（文責：梅野　莉子）

J's Gate Diningの説明を受ける様子

県人会の方と談笑する団員

J's Gate Diningフロア案内

小谷さんと仲良く記念撮影

第4次研修

マレーシアの街並みから歴史や文化を感じ、それぞれの思いを抱えて福岡へ

マレーシア／クアラルンプール市内視察、そして福岡へ　11月9日(土)～10日(日)

毎日が目まぐるしく過ぎ、あっという間に研修最終日を迎えた。私たちはクアラルンプールの歴史や文化を象徴する多くの場所を訪れ、市内の視察を行った。

最初に向かったのはマレーシア随一を誇るヒンドゥー教の聖地バドゥ洞窟。入口には272段のカラフルな階段と高さ43mの黄金色に輝く軍神がそびえ立ち、洞窟内は4億年前に形成された石灰岩によって神秘的な世界が生み出されていた。マレーシア人の約61%がイムラム教徒であるのに対し、ヒンドゥー教徒は約6%と少数だ(2019年2月1日の外務省データ)。しかしながら、この洞窟はマレーシアの文化遺産に登録されていることから、国内で文化、宗教の多様性が受け入れられていると感じた。

次に向かったのはロイヤルセランゴール社の工場。同社は世界的に有名なピューター（錫）製品メーカー。日本語の解説を聞きながら、実際に製造している様子を間近で見学できた。その機能性や美しいデザインに魅了され、工場内の販売コーナーではピューター製の高級グラスや置物を購入する社会人の姿が目立った。

続いてムルデカスクエアへ。1957年にイギリスからの独立を宣言した歴史的な場所であり、クアラルンプール発祥の地とされている。植民地時代の名残を感じる建築物が建ち並び、都心とはまた違う空気感があった。広場は歩行者天国となっており、多くの外国人観光客がその風景を楽しめるよう工夫されていた。

昼食はKLタワーの展望レストラン。地上200mからクアラルンプールの街を見下ろすと、ガラス張りの高層ビルやホテルがひしめき合っていた。また、建設中の建物も多く、街から溢れる活気を感じた。そう思ったのも束の間、美味しそうな料理に目を奪われ、一目散に食事に取り掛かった。地上200mで食べるご飯は格別だった。

お腹を満たしたところで、セントラルマーケットにてお買い物。小さなお菓子の小袋にハラル認証があることに気が付いた。もしムスリムの友達がいたらこれをお土産にしたらいいなと思った。こうした気付きも研修の一成果物だと言えるだろう。

そしてプトラジャヤのピンクモスクへ。1999年に完成したイムラム教の礼拝堂で、その名のとおりピンク色のドームが特徴。一度に15,000人を収容できるほどの大きさを誇る。女性は肌と髪を覆うために赤色のケープを着用した。実際に礼拝している方もいて、宗教観を感じる洗礼された空間だった。

研修を締め括る最後の食事は中華料理店。振り返ってみると、日が経つ程に所属や年齢を超えた団員間の交流が多く見受けられた。学生は社会人から、社会人は学生から、日頃感じることのない刺激やパワーを与え合えたと思う。

帰国のフライトでは体調不良者が続出した。この研修に心身共に全力を尽くした表れだろう。互いに助け合い、全員無事に福岡空港へ帰り着くことができた。長いようで短かったこの8日間は、それぞれの人生にそれぞれの形で消えることのない財産となったに違いない。

（文責：立石　知里）

KLタワーからの景色

セントラルマーケット

ピンクモスク

ロイヤルセランゴール工場

バトゥ洞窟

ムルデカスクエア

第5次研修

第1次研修～海外研修までに学んだことをいかに活かしていけるか

於：福岡県立社会教育総合センター　12月7日(土)～8日(日)

充実した海外研修から約1ヶ月。久しぶりに団員との再会を果たした。海外研修を通して、様々な勉強をしてきたと同時に、団員同士の絆も深まり、今回の第5次研修をとても待ち遠しく感じていた。

まず、異文化コミュニケーションと人事管理コンサルティング事業を行っているロッシェル・カップ様より「旅を振り返って、学びをインテグレートする」と題した講義をしていただいた。私たちが海外で感じたことや経験したこと、それをどう活かしていくのかなどを発表し、整理するという興味深い講義だった。お互いの考えなどを共有する機会はほとんど無かったため、新たな発見ができる貴重な時間だった。

続いて、外国人材の受入れについて、受け入れる企業、企業に配属される学生の方、両方の支援をされているGBASIA協同組合の香月栄史朗様より「外国人材受入れについての取り組み」について講義いただいた。

技能実習や特定技能制度については、第1次研修の講義でも制度や仕組みを学び、海外研修で訪問したJ-SATでも、技能実習生から話を聞いて学んでいたため、以前よりも興味深く受講することができた。

外国人材を受け入れる課題として、本人や家族、地域住民に対するフォローアップが必要だということを知った。外国人材の受入れは、人員不足解消と技術習得ができる、企業と外国人のお互いにメリットしかない制度だと思っていたが、送り出し、受け入れの双方に問題や課題が多くあることを聞き、とても衝撃だった。

最後は、NPO法人循環生活研究所のたいら由衣子様より「あなたから始まる食循環ローカルフードサイクリング」について講義いただいた。たいら様は、『人間の生活範囲の拡大などから自然は減少し、同時に自然のリサイクルも減少している。ゴミが増え、本来リサイクルできるものがなされず、焼却されてしまっている現状だ』と話された。そんな現状に対し、自分達が必要とするものを地域で循環し、楽しく安全に暮らしていきたいということから、家庭で出る「生ゴミ」に着目し、コンポストについて研究されたそうだ。そして、たいら様が行き着いたのが「ダンボールコンポスト」だった。

生ゴミには、野菜の生育に重要なリンが沢山含まれるなど栄養が豊富で、バランスもとてもよく、野菜を育てるたい肥として最適だという。そんな生ゴミの活用法を1人でも多くの方に興味を持ってもらい、簡単に楽しく続けてもらいたいとの考えから、小学生へのたい肥作り体験や、従来のコンポストとは違うバッグ型コンポストを作成するなど工夫をされている。地域全体で環境を良くしようと活動されており、とても興味深い講義だった。

講義を終えて、人材育成・教育チームと観光・食チームに分かれ、第6次研修のフィールドワークに向けて話し合いを始めた。これまでの講義や海外での経験を最大限に活かし、各チーム準備を進めることができていた。

今回のプログラムがより良いものとなるよう、また私たちの経験が、福岡県内で役立つものとなるよう団員みんなで協力し、準備を進めていきたいと決心した。

（文責：鳥江　徳子・有吉　美月）

講義名・講師

- 「旅を振り返って、学びをインテグレートする」・・・・・ Rochell Kopp（ロッシェル・カップ） Japan Intercultural Consulting　社長
- 「外国人材受入れについての取り組み」・・・・・・・・ 香　月　栄史朗　GBASIA 協同組合　監理責任者
- 「あなたから始まる食循環ローカルフードサイクリング」・・ たいら　由以子　NPO 法人循環生活研究所　理事

ロッシェル様の話を熱心に聞く団員

たいら様によるバッグ型コンポストの説明

講義後、積極的に質問する団員

フィールドワークに向けて話し合い

第5次研修

県庁表敬訪問

於：福岡県庁　12月20日（金）

県庁訪問に参加する団員13人が集合した。集合場所から副知事室に通され、表敬訪問の説明を受けつつ副知事が到着されるのを待った。登場した江口副知事は、非常に穏やかに対応してくださった。表敬訪問では、団員一人ずつ自己紹介を行い、その後、団員代表として坂口さんが挨拶を行った。

代表挨拶では、ミャンマーの僧院学校を訪問したことを報告していた。僧院学校とは、名前のとおり僧院の僧侶が運営しており、親を亡くした子どもや貧困などの事情により預けられた子どもたちがいる学校である。私たちが訪問した僧院学校には、約600人の生徒がいた。報告では、子どもたちと一緒に授業を受けたこと、教育環境の一端に触れ、衝撃を受けたことなどを話していた。

その後の副知事との歓談では、団員一人ひとりが海外研修を通して感じたこと、体験したことを自身の課題と交えながら話をした。人材育成・教育、観光・食のテーマ班に分かれて学んだこと、訪問先で感じたことについて、江口副知事は大変興味深そうに聞かれていた。また、私たちの報告の後、江口副知事は、英語の習熟を例に出し、物事を継続することの難しさを語られた。

今回、私たちは発展途上国を訪問するという貴重な体験をしたが、日常の中で他国の事について意識し続けることは難しい。しかし、私はアジア諸国に関心を持ち続け、将来発展の手助けをできたらと感じた。最後に、江口副知事と記念撮影を行い、表敬訪問は終了した。

私は、今まで日本の生活を当たり前のこととして過ごしてきたが、今回、発展途上国に行くことにより、とても恵まれた生活を送っていることに気づかされた。もし、このプログラムに参加していなければ様々なことに思慮することなく、毎日を過ごしていたと思う。

現在、福岡県はインフラ整備が進み、ますます県民が過ごしやすい環境へと発展し続けている。ミャンマーも少しずつ発展しているが、水道や電気などの私生活に必要なインフラ整備が遅れており、不衛生な環境を改善するにはまだまだ時間がかかるだろう。今回の研修で、福岡県の青年と現地の人達との交流が発展の一つのきっかけになればと思う。

また、今回の訪問で私たちが参加したプログラムが、福岡県をはじめとする多くの方や企業、団体のサポートがあって実現したことを再確認し、感謝の念を抱くとともに、今後の福岡とアジアを繋ぐ人材として貢献できればと思う。

（文責：大屋　歩夢）

副知事の話を聞く団員

団員の研修内容報告

副知事との記念撮影

第6次研修

〔人材育成・教育チーム〕

飛行機で、国境をこえろ！

於：福岡市西市民センター　1月18日（土）

私たち人材育成・教育チームは、これまでの研修で、言語の壁を乗り越え、意思疎通をはかることの難しさを痛感した。そのため、自分の意見を伝え、相手を理解しようとする意欲をもつことが重要だと考えた。第6次研修では、外国人と日本人が協働することで参加者の心境がどう変化するかを調査するため、チームで飛行機作りに挑戦する「飛行機で、国境をこえろ!」というワークショップを開催することにした。団員も各チームに1人ずつオブザーバーとして参加した。また、オイスカ西日本研修センターからも参加していただき、ミャンマーでの縁がこのワークショップに繋がり嬉しく思った。

ワークショップでは時間内で2機の飛行機を作り、それを飛距離、デザインの2つで競った。材料の買出しも可能とし、材料も紙に限らないという自由なルールのもと、メンバーの発想とチーム内でのコミュニケーションで進めていった。スマートフォンを駆使し、飛行機の折り方を調べるチームもあれば、テスト飛行を繰り返し、飛距離を伸ばすチームもあった。

私は、モンゴルからの研修生1名と日本人3名のチームに参加した。研修生のムギさんは、絵が得意で、紙飛行機にそれぞれの国を象徴するモチーフを描いてくれた。モンゴルと日本の友好を表しているそうで、その気持ちが嬉しかった。他のチームメイトは、ムギさんの紙飛行機とは別に、割り箸と輪ゴムを使って遠くまで飛ばそうと奮闘していた。ムギさんと何度も廊下でその飛行機を飛ばしてみたが、全く飛ばないと苦戦していた。ムギさんと一緒に試行錯誤している様子は、とても楽しそうに見えた。

デザインは、参加者と団員による投票制で順位を決定した。ペットボトルの飛行機や赤い可愛らしい飛行機など、チームの個性が出ていた。飛距離を競う場面では、とても熱い戦いとなり、会場の壁に当たるくらい飛行機が遠くまで飛んだときには、チームに関係なく盛り上がった。

チーム内での振り返りで印象的だった感想は、『長く飛んで欲しいと作った飛行機が全然飛ばなかった。だけど、その失敗で自分とムギさんの仲が一層深まった』というものだった。日頃、成功体験の共有を重視してしまうけれど、失敗が笑い話となって人との距離をぐっと近付ける材料になる。失敗した後にそれをどう活かすかを学ばなければと思った。

今回のワークショップを参加者も楽しんでくれたようで安心した。また、主催した私たちにとっても多くの気付きがあった。それは、「相手に対して敬意を払うこと」。今回は、飛行機を一緒に作って飛ばすという共通の目的があった。しかし、職場や学校、所属する団体により目的は様々で、全ての組織で同じようにはいかない。そのために、広い視野を持つことはどんな場面でも必要になるだろう。これから団員は様々な場面、組織で人と協働し、目的に向かって取組むことになる。その時に、今回の研修での学びを忘れずにいたい。

（文責：田中　佳倫）

どのデザインの飛行機に投票するか
真剣に悩む参加者と団員

それぞれが楽しんだワークショップになりました

この後、大きな飛躍を見せる紙飛行機

第 6 次研修

〔食・観光チーム〕

隠れた名所を載せたガイドブックを作成 ～新たな目線で福岡の魅力を発掘～

於：福岡観光コンベンションビューロー／福岡県観光連盟　1月23日(木)

私たちは海外視察中にマレーシアの旅行会社Apple Vacationを訪問し、同社責任者から「新しいものを生み出すのではなく、今ある福岡の未発掘な魅力を伝えてほしい」という声を聞くことができた。海外視察をする前の私たちは、「福岡に新しいランドマークを作るとしたら何がいいか」や、「福岡以外から何か誘致するのはどうか」などの新たらしいものを生み出すことばかり考えていた。しかし、求められているのは新しく生み出すことではなく、今ある福岡のまだ知られぬ魅力を発掘し、情報発信することだった。

そう気付いた私たちは、福岡の隠れた名所を今一度リストアップし、ガイドブックを作成することにした。リストアップするにあたり、知人の留学生達に嗜好をヒアリングし、日本人目線に偏らないよう工夫した。ヒアリングの結果、いちご狩りのような体験もの、自然や建物など風景を楽しむもの、ラーメンなどの食べものなど、人によって興味の対象が違うことが分かった。私たちは地域ごとに担当を決め、ジャンルに捉われずにまだ知られていないと思う名所を挙げ、実際に現地を訪れ、写真を撮り、ガイドブックの素材にすることとした。ガイドブック編集は、団員の有吉さんが率先して担当し、写真を中心とした見ごたえのあるものが出来上がった。

私たちは、作成したガイドブックを携え、福岡観光コンベンションビューローと福岡県観光連盟を訪問した。国内研修でお世話になった両団体は、福岡県の観光事業と密接に関係していることから、海外視察の情報の還元やガイドブックの感想、アドバイスをもらうことを目的とした。この訪問の一番の収穫は、ガイドブックに掲載している名所に込められた「ストーリー」が重要だというアドバイスだった。昨今の観光事業において、観光地の選定基準は金額の大小ではなく、その場所の歴史や人の想いに対して価値を見出せるかどうかに変化している。その価値が「ストーリー」なのだ。隠れた名所を発掘するということは、場所を見つけ出すのではなく、その名所に秘められた歴史や文化を伝えることだと知った。様々な価値観を持った世界各国の人が行来する今日に、誰に、何が価値のあるストーリーとして伝わるか想定するのは極めて難しい。だからこそ、どんなことでも絶えず情報発信していくことが重要だと感じた。観光事業の動向は、世の中の多様性に通ずるものでもあった。

新たな視点を持ち帰った私たちは、ガイドブックをブラッシュアップすることにした。 3月に行われる報告会では、ストーリーを伝えることに重点をおき、名所の説明文やアピールポイントに変更を加えた。一人でも多くの方に、ストーリーという新しい目線で福岡の名所を情報発信していく必要があると伝えられれば、福岡の発展への寄与、そして本研修の意義に繋がるはずだと思う。

（文責：立石　知里）

ガイドブックの説明後、(公社)福岡県観光連盟の豊島さんと記念撮影

団員レポート

Grobal wings 1班

伊藤　雄太
梅野　莉子
久保田　篤
坂口　至
立石　知里
平野　佑花

Grobal wings 2班

新谷　文都
大屋　歩夢
織田　孝徳
田代　公貴
田中　佳倫
永田　佑衣

Grobal wings 3班

有吉　美月
石井　敬
鎌田　拓
佐々木　大介
鳥江　徳子
原田　群士
宮本　麻希

Global Wings 2019 Group 1

LDCの潜在的な力に触れ

伊藤　雄太
北九州市立大学

私は北九州市立大学外国語学部国際関係学科で、東南アジア地域研究ゼミに所属している。私の学年には80人ほどの国際関係学科の生徒がいるが、東南アジア地域研究ゼミに所属しているのはわずかに6名。明らかに東南アジアに焦点を当てて勉強している人が少ないことが分かる。日本の学生の多くはアメリカやカナダ、オーストラリアといった英語圏の大国、または近くに位置する大国の中国に向かうが、今回私が訪れた東南アジアに向かう日本人が少ないのは何故か。主な理由として考えられるのは、日本人が東南アジアの存在を大きくは感じておらず、未発展の地域だから学ぶことが少ないと感じているからである。そんな古い考えには意気揚々と逆らっていこうではないか。

東南アジア地域の何よりの特徴は発展途上、つまり成長の余地が十分にあるということである。私たちの団体が今回訪れたミャンマーは、まさにそのような場所であった。ヤンゴンなどの都心部は発展途上なのが目に見えて分かるが、インフラや衛生面では少し問題がある。しかし、山間部に行くと道が舗装されていないことや下水道が整っていないことなど明らかに未開発な地が目立つ。また、「ヒト」の力が残っていることも顕著であった。日本が労働力不足に悩んでいるのに対して、ミャンマーでは人が余っている。良く言えば労働力が潤沢にあるということだ。また、私たちが訪れたOISCAで日本の農業技術が伝えられていたことや、街で見かける豊富とは言えないが増えている日本製品を見ると着実に発展が進んでいることが分かる。

ミャンマーはLeast Developed Country（後発開発途上国）と言われる。実際にその通りである地域もあった。しかし、日本をはじめとする先進国の支援とミャンマー人の真摯な働きによって開発はハイスピードで進んでいる。では日本はミャンマーとの関係性を変化ないままにしていていいのか?上から目線で「支援してあげる」というだけではなく、同等のパートナーとしてgive and takeを求めていくことが必要なのではないか。日本がこれまで以上にミャンマーを支援し、ミャンマーが日本に新しいアイデアや伝統的な技能を日本に伝える、さらに有力な人材を日本に送り出すことは日本の労働力不足解消にもつながる。このようにしてお互いに高めあう良きパートナーになれるのではないか。「ヒト」「モノ」「カネ」がよく動き、経済発展を続ける東南アジアから目を離すことは絶対に許されない。

Global Wings 2019 Group 1

初めての海外渡航から学んだたくさんの宝物

梅野　莉子
福岡女学院大学

私が「福岡県グローバル青年の翼」に参加した理由は、将来、国際的に活躍する人材になるという目標を実現するためには、自分の視野や考え方を広げ、柔軟に物事に取り組む必要があると考えたからだ。そして、航空・観光業に興味を持っており、貴重な経験ができるプログラムに魅力を感じたからだ。

私は、この研修が初めての海外渡航だった。この研修での経験は、毎日驚きの連続で今も鮮明に覚えている。海外に実際に行ってみて感じたことは、言語を学ぶ大切さだ。私は、大学で語学の勉強をしているが、国際的な人材になるためには英語を学べば実現できると思い勉強をしていた。しかし、実際に行ってみると、言語はあくまでもコミュニケーション手段の一つであることを強く感じた。そして、言語を話せることで多くの情報や経験を得ることができるということを実感し、言語を学ぶことの本質を理解したような気がした。

渡航前までは、ミャンマーに対して開発途上にある農業国という先入観を持っていたが、近代化の進展にはとても驚いた。一方で、水道の水質問題や道路の未整備などインフラ問題も目についた。しかし、ミャンマーの人はいつも笑顔で、毎日楽しそうに生活している姿が印象に残っている。また、現地のガイドさんから、ミャンマー人は相手に尽くすことで徳を積むという仏教の教えがあると聞いた。私たちが小さな村を訪問した時、心からの歓迎とおもてなしをしてくださったことに、とても感動したことを覚えている。また、地方の村にもきらびやかで壮大な寺院がそびえ立っており、仏教にかけるお金が多いことから、ミャンマー人の宗教に対する信仰の厚さを実感した。

また、マレーシアは、想像していた以上に都市の発展が進んでいた。マレーシアは、マレー系、華人系、インド系の民族が共生している多民族国家であり、人々は自然にお互いの違いを理解し合い生活していた。私は、華人系小学校に行った時、現地の小学生に日本語のサインをたくさん求められた。年齢や言葉は違うのにもかかわらず、ジェスチャーで伝えてくる積極性からコミュニケーション能力の高さを実感した。

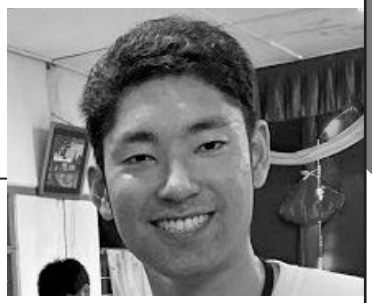
本研修を通して、東南アジアの発展の勢いを強く体感することができた。この研修をきっかけにミャンマーという国にとても興味を持ち、また、国際協力活動で活躍されている日本人が多くいることを知り、私も国際協力活動に興味を持ち参加したいと思っている。そして、この研修を活かし、将来、福岡とアジアの経済発展に貢献できる人材になれるよう、残りの3年間学んでいこうと考えている。

最後にこの研修に携わっていただいた方々に感謝でいっぱいです。また、この研修を共に頑張った団員の皆様との思い出は一生の宝物です。ありがとうございました。

Global Wings 2019 Group 1

便利な中にも実際に見て感じることの大切さ

久保田　篤
九州大学大学院



私は、現在大学院でASEAN地域における環境に優しいエネルギー利用や発電システムの実現に向けた研究に取り組んでいる。言わばTHE理系の人間である。そんな私が「福岡県グローバル青年の翼」に参加したいと思った動機は2つある。1つは、地元福岡に拠点を置きつつ、世界を舞台に活躍できる技術者を目指しているからだ。もう1つは、外国の文化や価値観を知るためには、実際に現地の空気を感じ、現実を直接見ることが非常に大切であると考えているからだ。

今回の研修で、ミャンマーとマレーシアを訪問した。ミャンマーは「アジア最後のフロンティア」とも言われ、将来は顕著な経済成長が見込まれる。一方、マレーシアはASEANの中でも経済発展が進んでおり、IT技術などの普及が盛んである。対照的な両国を訪問するなかで、今後拡大するであろうアジアの風を感じるとともに、アジアにおける日本の現状や課題を考えさせられることとなった。

ミャンマー訪問は初めてで、とても刺激的だった。女性は、いつでもどこでも「タナカ」（現地の化粧品）を顔に塗り、誰もが「ロンジー」（現地のスカート風の正装）を着用していた。日本では絶対に見られない光景である。ミャンマー文化を尊重したい私たちは迷わず「タナカ」を塗り、「ロンジー」を着用した。すると自然と、現地人との壁は感じなくなり、異文化を理解するとはこのことかと思った。夕食交流会では、お互いの文化を紹介し合って親密な関係を築くことができた。話を聞く中で、未だ生活の不便さはあるものの、彼らの目は夢や希望に満ち溢れていたのが印象的だった。

マレーシアの小学校では、民族、多文化、多言語が入り混じる特殊な環境が存在し、児童はその環境に上手く順応しているように思えた。積極性があり、学ぶ意欲も高く、将来もし彼らのような人と働くことになったとすれば、日本人の優位性はどこにあるのだろうかと少し不安になった。

異なる風景を持つ両国であったが、両国とも野心にあふれ、国際社会を生き抜いていこうとする強さを感じた。私たちのような若い世代は近い将来、このような国際社会の中で様々な変化に対応しながら生き抜く必要があるのではないかと感じた。

この研修を通じて、現地を肌で感じられた経験は非常に貴重であった。このような機会を与えてくださった福岡県の方々や経験を共有できた参加メンバーには感謝したい。そして、この経験を基に、将来は国際社会で活躍できる技術者となりたい。

Global Wings 2019 Group 1

国際的視野への第一歩

坂口　至
タカ食品工業株式会社

私が勤めるタカ食品工業株式会社は、給食用小袋ジャムや製菓製パン向け業務用フルーツ加工品等の製造を手掛けています。近年、弊社でも東南アジア方面の外国人技能実習生の受入れを開始し、私の携わる業務でも、商品情報の翻訳や食品のハラル認証調査など海外関連の業務が増えてきている現状です。周囲の急速な国際化に対し、海外の生きた文化を学ぶことで国際的視野を得られる大きなチャンスであると考え、福岡県グローバル青年の翼に参加しました。

事前研修では、現在海外で活躍されている様々な業種の方の事業展開や現地工場での人材育成、外国人向けインバウンドの状況などの貴重なお話を拝聴し、インターネットや本だけでは得られない見識を深めることができました。

また、8日間の海外滞在は非常に濃密な経験となりました。特に、ミャンマーはアジア最後のフロンティアと称される通り、一度郊外に出れば道路の舗装もままならないインフラ整備が不十分な箇所も多かったですが、そんな中でも真面目かつ穏やかな方ばかりで、特にオイスカ研修センターの農業実習生や、J-SAT Academyの方々の「この国を発展させたい、未来を良くしたい」という真摯な思いに非常に感銘を受けました。

今回滞在した国と日本には、それぞれ異なった宗教、歴史、文化があり、その国で生まれ育ち、生活する人たちの考え方も大きく異なります。実に単純で当たり前の話ですが、実際に現地の方と交流する中で、自分がいかに潜在的に日本的常識に囚われて相手を見ているか痛感し、彼らとの考え方のギャップに驚かされる毎日でした。

日本では、これから少子高齢化による労働人口の減少に伴い、多くの外国人労働者を迎えることが確実視されています。仕事上、外国人の方と接する中で上から目線で日本の労働文化に従えと言うのではなく、受入れ側の私たちが歩み寄らなければ、意図せぬ誤解や問題が起こりかねません。海外の知識や語学スキルを磨く事はもちろん大事ですが、今回の研修で身をもって学んだ「立場や生き方が違えば、考えている事も受け取り方も異なる。それは当たり前の事であり、尊重しなければならない」という考えを念頭に持つこと、ここから国際的視野を持つ第一歩が開けると思います。

最後にこの研修参加を支援してくれた会社をはじめ、共に学んだ団員の皆様、研修に携わられた多くの方々のご協力のおかげで貴重な経験ができたこと、心より深く感謝いたします。ありがとうございました。

Global Wings 2019 Group 1

多様な価値観について改めて考える機会になりました

立石　知里
株式会社福岡銀行

この研修が始まる前、私は「研修を通じて、多様な価値観を身に付けたい」と思っていました。しかし、国内、海外研修を経験していく中で「多様な価値観を身に付けるとは具体的に何を指すのか」という疑問に変わりました。それと同時に、ミャンマーやマレーシアでの企業訪問、現地の方との交流は、その疑問への答えも教えてくれました。

昨今、国境を越えたモノや人の往来が今まで以上に頻繁に行われています。ミャンマーの日本向け縫製工場で働く日本人とミャンマー人、人材研修センターで会った日本へ行こうとする外国人、それをサポートする日本人スタッフ。どの光景も日本と海外との繋がりを、とても実感させるものでした。日本で働こうとしているミャンマー人の女性と話す機会がありました。なぜ、日本で働くのか、不安なことや期待することを聞いたり、彼女へ日本で挑戦してみてほしいものを伝えたりすることで気持ちを共有し、相手への思いやりが生まれたように感じました。グローバル社会において、このような積極的な相互理解はとても重要な価値観だと確信しました。

海外研修で最も印象的だったのは、労働が生活に直結していると痛感させられたことです。ミャンマーの縫製工場とマレーシアヤクルト工場の方は、雇用を生み出すことの必要性を強く訴えていました。私が仕事上でお会いする中小企業の経営者も、雇用を安定的に継続させることを大前提に考えている方が多くいます。どんな国においても、生活するには働いてお金を稼ぐ必要があります。そのためには働く場所、雇用される機会がなければなりません。だからこそ、雇用を生み出すことが重要視されていると思います。日本で働く外国人、外国で働く日本人、どちらにもその労働の背景には生活が直結しています。お互い同じ境遇であると認識することは、相互理解にとって必要不可欠な気付きであるはずです。

多様な価値観を身に付けるとは、相手を知ろうとする姿勢を持つこと、お互いの同じ部分、あるいは違う部分に敬意を払うことだと感じました。会話や経験を通じて相手を知ろうとする、自分を知ってもらおうとすることは多様な価値観を身に付けるスタートです。その相互理解の過程で、お互い共有し合える感覚を見つけることができると思います。そして、通ずる部分があるからこそ、相手の異なる文化や習慣に理解を示すことができ、やがてお互いに敬意を払うことのできる関係性につながるのだと思いました。

この研修で気付けたことを自分の根底に持ち、これからの仕事や生活に取り組んでいきたいです。

Global Wings 2019 Group 1

私の生き方

平野　佑花
九州大学

私が、この研修が始まる前から常に考えていたことは、自分の生き方についてだ。今年20歳になったばかりで、未だ最たる専門知識のない平凡な学生の私が、今後この研修を活かしてどのように人生を歩んでいくか、このことをずっと考えてきた。

今回の研修では、私の生き方に指南を与えてくれるような、心優しく温かい方々との出会いが実に多くあった。みんな、心から私たちを歓迎し、楽しそうな生活を見せてくれた。彼らを見て、私もそのような歓迎の精神や暮らしを楽しむ心持ちを、見習わなければならないと感じた。

さらに、彼らの生活は、自分の今後の生き方の方向性を考える大きなきっかけになった。都市部から離れるほど、今にも壊れそうな家に住む人々がいたり、道路わきに大量のごみが投棄してあったり、水場の衛生状況に疑問を感じたりする場面が多くあった。初めはかなり衝撃的に感じたが、後にそれは私が日本での生活と比較して感じたことだと気づいた。日本と違うから、もっとこうあるべきだなどと理想論を語るのではなく、本当に大切なのは、彼ら自身が望むことを理解することだと気づかされた。もし私が海外で働くとしたら、自分のエゴで何かをしてあげるのではなく、まずは現地の人々のことを理解し、彼らが望むことを実現するために協力するべきだと思った。

他にも驚かされたのは、宗教の重要性である。ミャンマーとマレーシアの両方において、寺院やパゴダ（仏塔）、モスク（礼拝堂）など維持費だけで、かなりの資金を要する宗教施設が数多く存在した。無宗教の私にとって、そんなに宗教にかけるお金があるなら、インフラ整備や衛生環境の改善に資金投入した方が良いのでは、とどうしても考えてしまった。しかし、宗教と共存し、守ろうとする現地の人々を見て、私の考えがいかに愚かなものか痛感した。今後ますますグローバル化していく社会において、わかり合うためには、相手の持つ文化や歴史を理解しようとする心が大切であることを学んだ。

さらに私が学んでいる法学が、現地の人にとって有用であることや、福岡市がミャンマーに技術提供を行っていることなどを知った。もしかすると、私にも何かできるかもしれないと考えるきっかけになった。

以上のような経験をしてもなお、私の将来ははっきりしていない。しかし、この研修を通じて、一つのコンパスを手に入れたような気がしている。グローバルに生きることを求められる時代において、私がどのように生きるべきかを教えてくれた海外研修だった。

Global Wings 2019 Group 2

異なる環境に身を置いて

新谷　文都
福岡大学

私がこの研修に参加した理由は、今まで海外に行ったことが無く、異なる環境に身を置くことで自分の知らない世界を肌で感じ、視野を広げるためだった。結果から言うと、ただ日本で過ごす日々では味わえない経験を積むことができた。

ミャンマーやマレーシアは発展途上国と言われており、私たち先進国と呼ばれるものにとっては生活面などで大変不便に感じ、苦労するだろうなと思っていたのが本音である。

しかし、実際に苦労したのはトイレくらいで、他は難なく過ごすことが出来た。発展途上国、それは字が表しているようにまだまだ経済成長の途中である国を指しているが、イソップ物語の『ウサギとカメ』に例えるならカメのような存在のように思える。我々ウサギ(日本人)の多くはカメ(発展途上国)を見下し、余裕の態度を取り、居眠りでもしているのではないかと思ったほどである。

今回訪問したミャンマーやマレーシア、特にマレーシアは超高層ビルが当たり前のように立ち並び、想像を超える光景であった。さらに、研修で訪問した華人系小学校では、小学生で英語、中国語、マレー語の三か国語を学んでおり、我々よりも進んだ教育を受けているように感じられた。また、ミャンマーも近年民主化が進み、これから驚異の成長を遂げる可能性を大きく秘めている。

一方で、日本はグローバル社会が加速する中、保守的な動きが目立つ。海外に実際に行き、正直危機感を募らせた自分がいた。海外に行く前の講義で聞いたとおり、社会で競争する相手は日本にいるのではなく、これからの相手は海外の人たちであると実感できた。

私は現在、教職を取っており、ゆくゆくは教育関係に就きたいと考えている大学生である。今、日本は社会の変化に対応するため、文科省による教育改革が進められている。しかし、うまくいっていない部分が多く、なかなか難しい現状を強いられている。どうすればもっと良い方向に向かうだろうか、何をすればいいのか。これから日本の教育現場にも当然のように“外国人”がいる状況になった時、我々は多民族国家であるミャンマーやマレーシアのように文化の違いを理解し、共に尊敬しあえる関係をきちんと築いていけるだろうか。

今回の研修では多くの疑問や課題ができた。今後も日々いろんなことに挑戦し、そして経験を積み、福岡をはじめ、日本の発展に貢献できるように成長していきたい。

Global Wings 2019 Group 2

現地の人と交流して

大屋　歩夢
九州工業大学

私がこの研修に参加した理由は、日本国内だけで過ごしていては知ることのできない他国の暮らし、価値観、文化を知りたいと思ったからだ。初めにミャンマーの空港に降り立ったとき、これから体験することに対して、胸が高鳴っていた。

ミャンマーで最も印象に残っているのは、オイスカ研修センターのパコックを訪問したことだ。私たちは、研修センターや近隣の村で様々な歓迎を受けた。ミャンマーでは、ご馳走を振る舞うことで歓迎を表しているようで、研修センターや訪問先の村では、必ずスイカ等のフルーツ類が用意されていた。ここで面白いのは、日本人は完食することを礼儀正しいと考えるが、ミャンマー人は違う。ミャンマーは、国民の9割が仏教徒で、寄付をすることにより来世での徳を積むことができるという考えを持っている。食事の残りを野犬や鶏等に分け与えることは、徳を積んでいることになる。

私は、大量のご馳走に圧倒されながらも彼らの示す歓迎の気持ちに胸が暖かくなり、同時にもてなしの気持ちに国による違いはないことを学んだ。

また、マレーシアでは、摩天楼という言葉が相応しい超高層ビルが多く立ち並んでいた。また、超高層ビルのすぐ隣に寂れた廃墟や工事中の標識があり、古いものから新しいものに置き換わりつつある途上のような独特の街並みだった。抱いていた発展途上国のイメージより、ずっと経済発展しており驚いた。また、ガイドさんから地震がほとんど起きないため、耐震性を考慮せずビルを建設するのが普通と聞き、衝撃を受けた。

私が海外研修を通して印象に残っていることは、現地の人が積極的にコミュニケーションをとってきたことだ。それを顕著に感じたのは、マレーシアの華人系小学校を訪問したときだった。小学校の生徒たちは、外国人である私たちに物怖じせずに話しかけてきた。また、質疑応答では、教師の方々が次々と私たちに質問を投げかけてきた。それは、私たちに対して好奇心を持っていることの現れと同時に、すでに国際交流を円滑にするすべを身に付けているのだと感じた。国際社会では、常に相手のことをよく知ろうとする積極的なコミュニケーション能力が必要だと感じた。

私は研修を通して、グローバル人材としての積極性や好奇心の重要性を感じることができた。研修中、私自身も懸命に簡単な英語やジェスチャーで会話を試み、現地の方々と思いを通い合わせることができたと思う。ミャンマーやマレーシアで異国の文化や宗教、さまざまな特色の違いを学び、一回り成長することができた。この経験を活かし、グローバルな活動に参加し、社会貢献していければと思う。

Global Wings 2019 Group 2

海外特有のダイナミズムを感じて

織田　孝徳
田中藍株式会社

私が社会人7年目としてできる業務の幅が拡がり、もう一つ上のレベルを求めていたときに、会社から福岡県グローバル青年の翼に参加する機会を得ることができました。もともと、海外への抵抗があり、仕事やプライベートでも避けてきた部分がありましたが、実際に海外研修に参加し日本にはない力強さを肌で感じることで自分自身の視野が研修前と比べ広くなったように感じています。

私の勤める田中藍㈱では、化学工業薬品をメインに国内のみならず、海外の企業へも積極的にビジネスを推進しています。仕事でタイ、ベトナムへのビジネスに挑戦をしましたが、その際には海外へ渡航する積極性を身に付けることができませんでした。その原因は、渡航先の文化や商慣習の認識不足。また、海外渡航の経験が豊富な上司や現地駐在担当者が同席していたことで、人任せとなっていたことが原因と感じています。

この経験から、国内ビジネスのみで終わる可能性に危機感を感じ、一度しかないチャンスをつかむ気持ちでミャンマー、マレーシアへの研修に参加しました。海外研修で一番印象に残ったのは、クアラルンプールの発展と日本と変わらない生活水準です。クアラルンプールには50m置きに高層ビルが立ち並んでおり、ビルには世界の名立たる企業が入っていました。また、現在建設中の118階建てタワーにも衝撃を覚えました。生活環境でも多種多様な民族が住み、日々の仕事も言葉も文化も違う中で、うまく融合されている姿に愕然としました。私が経験したことがない日本のバブル期は、現在のクアラルンプールと同じであったのではないかと思いました。改めて、発展が急速に進むクアラルンプールで仕事をしてみたいと感じています。

また、クアラルンプールとは真逆の生活環境になるミャンマーのオイスカ研修センターでは、発展が乏しい生活水準でトイレ、風呂、食事は、私にとって苦労を極めるものでした。ただ、現地の方はこの生活に屈することなく、ハングリー精神が豊富で、特にオイスカ研修センターの人たちは自国への理解と責任を背負い、自国発展を夢描いている若者が多くいました。日本という裕福な環境にいる自分が本当に甘やかされていると感じ、今後ミャンマー発展に向けて、日本から協力できることはないか考えていきたいと思います。

今回の研修で、海外特有のダイナミズムを感じられたことが一番の収穫です。今後は、クアラルンプールのような発展性の高い国での仕事、ミャンマーのような化学プラントがない発展性が乏しい国での仕事をうまく棲み分け・分析し、ビジネスの新規開拓に向け、積極的に挑戦していきたいと思います。

Global Wings 2019 Group 2

日本人であることに慢心してはならない

田代　公貴
九鉄工業株式会社

情報インフラは、世界を網羅しつつある。しかし、実際に私が見たものは、メディアから与えられた情報とは違う部分があると感じた。そして自分を含む、日本人の姿を改めて見つめなおす必要があると感じた。

「日本人は真面目で頭が良い」と日本のメディアは伝えている。その情報が真実かどうかは、私たち一人ひとりの行動にかかっているため、私個人としては「頑張ります」としか言いようがない。しかし、解釈の仕方によっては「外国人は怠け者で、頭が良くない」と判断される伝え方だと思う。私自身、そのように解釈し、イメージに踊らされていたからだ。しかし、海外研修を経て、その考えは改めなくてはならないと感じた。

ミャンマーのオイスカ研修センターでは、未来を担う同世代の青年たちと交流することができた。彼らのひたむきな姿勢に感銘を受けたのは勿論だが、私にはどうしても忘れられない話がある。それは、研修生達との交流会でクンネ・チャン・ウン氏と話をしたときのことだ。「オイスカでは様々な事を学ぶと思うけど、あなたが実際に村に帰ってやりたいのは、どの仕事ですか。」と私が聞くと、「全て。全ての技術を村人に伝えたい。」と彼は答えた。その回答に、私はとても恥ずかしくなった。オイスカ研修センターは、農村開発のため青年リーダーを育成するところだと、研修で学んでいたが、その本当の意味を理解していなかった。

現在、私は技術者見習いとして、建築現場の施工図面を描けるようになるべく多くのことを学ぶため、出向のような形で研修に参加している。私が考えていたリーダーは、図面を描けるようになり、将来は後輩に図面の描き方を指導する人物だと思っていた。しかし、それはリーダーではなく、先輩に過ぎなかったことに気づかされた。私は、クンネ・チャン・ウン氏が描く未来に、本当のリーダー像を感じた。

また、日本の生活水準の高さが能力の高さだと誤解している人も多いと思う。日本は、経済発展が急速に進んだ国であることは間違いない。しかし、これからを担う私たちが、その情報に慢心し、努力を怠ってしまうとすぐに追い越されてしまうだろう。私たちは、海外の姿勢を見習わなくてはならない。

そして、この研修で知り合った同年代の仲間は、私にとって大きな財産である。社会人になり、だんだん狭くなっていた視野を、海外研修で再び広げることができた。この研修は、私の人生の軌道修正になった旅だった。

Global Wings 2019 Group 2

異文化にふれる

田中　佳倫
大刀洗町役場

私は、東南アジアの文化や歴史を学び、現地の人と交流することで国際的な視野を広げたいと思い、この研修に参加しました。インターネットで検索すれば、すぐに欲しい情報を得ることができる時代に、自分で体感すること、直接話を聞くことの大切さを再認識した海外研修となりました。

ミャンマーでは、ヤンゴンとオイスカ農村開発研修センターのあるエサジョを訪れました。ニャンウー空港着陸前、航空機の窓から見た褐色の土地、低い木々はヤンゴンで見た景色とあまりに異なるものでした。

カラッと乾燥した空気と刺すような日差しの中、エサジョの地に降り立ったときに思い出したのは、事前研修の講義で聞いたミャンマーの気候の多様性についての話でした。ミャンマーは縦に長い国で、気候帯も3つに分かれており、栽培できる農作物も違うということ。講義で聞いた中央乾燥地帯とはまさに「ここ」のことなのだと思い、些細な事かもしれませんが、ミャンマーという国の広さと自然資源の多様さを実感した出来事でした。

ミャンマーで働く日本人からは「ミャンマー人は、来世を大事にしている」や「よい来世を迎えるため、寄付やお布施に熱心」という話を交流会や企業訪問で伺いました。このことは「ミャンマーにお墓があまりないのはどうしてか」や「パゴダはどうしてこんなに豪華なのか」と不思議に思ったことと結びつき、ミャンマーで大切にされている価値観のひとつを学んだように思いました。また、ミャンマー人と一緒に働き感じた、日本とのギャップや工夫を聞き、違いを自覚した上で対応することの大切さを学びました。

マレーシアでは国内最大手の旅行会社Apple Vacationを訪問しました。マーケティング担当者からマレーシア人旅行者へは、雪や白川郷の合掌造りなど、マレーシアにはないものが人気観光地のアピールポイントとなっており、福岡・九州の認知度はまだ低いと伺いました。普段聞くことはできない貴重な話を伺って、今後は既存の観光資源の魅力を捉え、海外旅行者の求めるものを把握することが重要だと思いました。

私が働く大刀洗町には、多くの外国の方が生活しています。また、私が担当している介護保険分野でも外国人材の活用が拡大してきており、今後ますます日本国内で外国の方と接する機会が増えていくことなります。そのときに、今回の研修での経験を活かし、相手の価値観を理解し、対応していきたいと思います。

Global Wings 2019 Group 2

異なる文化・宗教を理解することの大切さ

永田　佑衣
九州大学

私がこの研修に参加したのは、東南アジアという国の実情を実際に自分の目で確かめてみたかったこと、また来年から始まるJR九州での社会人生活において、この研修で得られる国際的な視野が活かせると思ったからだ。

この研修は、毎日が新しいことの連続で、本当に密度の濃い時間だった。私のこの研修での1番の学びは「異なる宗教や文化を理解することがいかに大切か」ということだ。日本だけで生活していると、普段の生活や宗教について改めて考える機会はなく、あたかもこの生活が標準だと勘違いしていた気がする。

まず驚いたのは、ミャンマーで寺院を訪れたときだ。手をたたいて笑ったり、騒いだりしてはだめ、とガイドさんに言われていたのに、そのことを忘れて騒いでしまったとき、周りにいる現地の方の冷めた視線と静けさに気付いた。その地の宗教上のマナーを理解せず、土足でずかずかと足を踏み入れてしまったような気になり、とても申し訳ない気持ちになった。海外経験の豊富な添乗員の服部さんも、「海外に行くときは、まずその国の宗教から調べる」と言っていたほど、各国の宗教観を理解することがいかに重要なのか分かった。

また、食事の場面では日本人は出されたご飯は食べきることが当たり前だ。しかし、ミャンマーでは出されたご飯を残すことは、満腹の合図であるとともに、残ったご飯を他の人に分け与えることは徳を積むことに繋がるため、出されたご飯は食べきらないのが正解だ、ということも新たに知った。

そして、1番はっとさせられたのは縫製工場とJ-SATでのお話だ。縫製工場の玉崎さんの話を聞き、ミャンマー人は自国の発展に対してあまり精力的ではない、と勝手に決めつけていた。しかし、その後に訪れたJ-SATの若者が、自国を自らの手で発展させるというやる気に満ちているのを見て、同じミャンマー人というくくりで勝手に決めつけていた自分に気付いた。もし、今後他国と関わる機会があれば、その国に対する固定概念や偏見は捨て、どんな場所で、どんな人に対して、なにを提供すべきか、相手のことをよく理解したうえで行動することが大切だと感じた。

今回、このような学び多き研修に参加させていただけたことに感謝するとともに、「自らの手で自国を発展させたい」と熱く語っていたミャンマーの若者たちに負けないよう、私もこれからの福岡そして日本を自分が盛り上げていくという気持ちを忘れずにいたい。

Global Wings 2019 Group 3

アジアの存在感

有吉　美月
福岡女学院大学

私が応募した理由は、新しいことに挑戦したい、学生のうちに多くのことを吸収したいと思ったからだ。この研修を通して、これからの自分の可能性を広げることができると確信した。

事前研修でミャンマー、マレーシアのことを知ったからこそ、福岡の良さに気づいたと同時に、日本のことを知っているようで知らなかったと思い知らされた。歴史や政治、経済などの知識が足りておらず、外国を知る前に日本を知るということがどれだけ大切かが分かった。

オイスカ研修センターで出会った研修生とは、日本語も英語もほとんど話せない状況で意思疎通が難しいところもあったが、ゲームやダンスを通して打ち解けることができ、とても嬉しかった。また、私にとって当たり前だったことがミャンマーでは当たり前でなかったと知り、なんて幸せな生活ができていたのだろうと思ったことが多くあった。

ミャンマーは、成長が高まる一方で、深刻な経済格差、環境問題が存在することも確かだった。物乞いをする人がいたり、道路や川にゴミが大量に落ちていたり、食事の際にハエが飛び回っていたりする状態だった。たとえ現地では当たり前だとしても、一刻も早くこの状況を打破できないかと強く思った。

また、マレーシアで特に印象に残ったことは、小学校の子どもたちだ。授業を見学し、会話をして分かったが、彼らは積極的で好奇心に満ちあふれていた。それは、幼いときからの環境がそうさせているのだと思った。多種多様な人と関わることは、学習面、生活面などあらゆる面で彼らを成長させている。これは、日本にはない環境なので、とても羨ましく思った。マレーシアは親日国でこれからも支え合っていく国であるとともに、素晴らしい人材が数多く存在するライバル国であると認識した瞬間だった。

このように、両国をみてカルチャーショックを受けた場面もあったが、視野が広くなり、日本の常識や考え方にとらわれない柔軟性のある考え方ができるようになったと感じている。また、人は環境次第で考え方が大きく左右されるということを、身をもって実感した。

異国の土地で様々なことから刺激をもらい、ダイバーシティの理解に繋がる研修だった。これから先、訪問の機会がないような村や僧院学校、工場などを視察できたことは貴重な経験になった。何より、自分と異なる考えを持つ学生や社会人、海外で活躍する方、さらに現地の方と交流できたことが私にとって一番の収穫だ。素敵な時間を共有でき、新しいつながりを持てたことは一生の宝物になり、私の自信につながった。何事にも貪欲に、そして自分がやりたいと思ったときに行動し、発信できるグローバルな人材を目指し、日々努力していきたい。

Global Wings 2019 Group 3

海外に行くことで得られた多くの気づき
～文化・宗教・生活習慣・観光・食～

石井　敬
行橋市役所

私が勤務する行橋市では、東南アジアからの外国人労働者が増加しており、東京オリンピックは、外国人を集客する絶好の機会である。そこで、外国人が生活しやすい環境づくりや外国人向けの観光施策、特産品の販売戦略について学ぶため、本研修に参加した。

ミャンマーでは、ヤンゴンは都会として発達していたが、飛行機で1時間半程北のバガンは、道路も舗装されてなく、自給自足が成り立つ田舎で全く異なっていた。また、マレーシアではマレー系、中華系、インド系の異なる民族が生活しており、1ヵ国を一括りに捉えてはならないと感じた。

ミャンマーは長年軍事政権であったため、行政の決裁権が中央に集中しており、決定に時間がかかるため、日本のODAの資金を受取る体制が整っていないという現状に驚いた。

異文化理解の大切さについても、本質的な理解ができた。人材支援等を手がけるJ-SATの担当者からの「当たり前を日本基準で考えるな」という言葉が印象に残った。例えば、ご飯を残すのは悪い行為という考えは日本の考え方で、ミャンマーでは残したご飯を動物等に分け与える事で来世によい影響を与えると考えられている。

観光については、福岡観光コンベンションビューローなど福岡県内でのフィールドワークを、海外研修と併せて実施することで、福岡県の誘致対策と海外のニーズとのギャップに気づくことができた。マレーシアの旅行会社Apple Vacationから福岡の認知度が低いことを聞き、衝撃を受けた。しかし、福岡では、知名度よりも客単価を上げたいと考えている。集客方法も、福岡ではインターネットを通じて情報発信しているが、現地では一般旅行者向けの国際旅行フェアであるMATTA Fairを通じて情報収集している。福岡では高級ホテルが建設されているが、現地は宿泊費の安いホテルを求めている。こうしたギャップの解消が課題であると感じた。

マレーシアヤクルトでは、現地で展開する上でハラール認証が必要不可欠であること、マレー系や中華系など、民族毎に異なる販売戦略が必要であることを学んだ。また、マレーシアの華人系小学校では、異なる民族の子どもたちが多言語を学び、最先端のICTを活用した授業が行われていたのが印象的であった。

私は本研修を通じ、東南アジアの文化や宗教、生活習慣を理解し、外国人向けの観光施策などを考える糸口を掴むことができた。また、年齢や職業も異なる団員から様々な考え方を学び、有意義であった。この経験を活かし、職場や地域でグローカルに活躍していきたい。

Global Wings 2019 Group 3

海外研修に行って感じたこと

鎌田　拓
九鉄工業株式会社

私が研修に参加したきっかけは、会社から毎年若手の社員が参加しているからというものでしたが、実際に海外に行くにあたり、日本と海外がどれだけ違うのかを知るという大きな目的を持って研修に臨みました。

実際に、ミャンマーとマレーシアを訪問して思ったことは、日本人と外国人にあまり違いはないということでした。私は、関西や千葉、東京に住んでいたことがありますが、日本人と外国人の違いは、県民性の違いくらいの差しかないというのが正直な印象です。そう思うことで、海外研修に対する漠然とした不安はなくなりました。確かに、日本人、ミャンマー人、マレーシア人など本当にそう変わらないのかというと、そうではありません。しかし、それを細分化していくと、明るい人、まじめな人、静かな人などが、それぞれの国で思うままに生きているだけで、人間性は変わらないように感じました。

人間性での差異はないということを述べましたが、日本と大きく違うと感じたこともあります。それは、インフラ整備についてです。私が勤める会社は、鉄道に関する工事を主体として土木、建築などの様々な工事を手掛けている総合建設業であり、今回の研修では仕事と関わる部分として、海外のインフラ整備や建物を特に観察していました。ミャンマーについては、都心部でもコンクリート造りの建築物にヒビが入っていたり、道路の舗装ががたついていたり、そもそも未舗装だったりとまだまだ発展途上であることを認識しました。また、上下水道などの環境衛生についても整備不足で、日本のように水道やトイレがあって当たり前の生活ではなく、ヤンゴン市から少し離れると電気すら通っていないのが現状でした。

しかし、現地の方々にはその環境が当たり前であり、不自由さを感じることなく暮らしていました。現地の方々の生活環境改善のためにも、土木、建設業などのインフラ整備は非常に重要であることを再認識することができました。

最後に、研修に参加して、以前よりも確実に視野が広くなったように感じます。ミャンマーやマレーシアの方々の考え方やその国で活躍する日本人の考え方を知ることができ、私にとって海外研修はとても有意義なものでした。今後は、この研修で感じたことや学んだことを活かし、物事を多角的な視点から考え、新しい発想を繋げていけたらなと思います。

Global Wings 2019 Group 3

海外旅行では味わったことの無い経験

佐々木　大介
杉村包装資材株式会社

私は、取引先で外国人と接する機会も多く、国際的な視野を広げ知識を身につけたいと思い、今回の研修に参加することにしました。

第1次研修～第3次研修までは、ミャンマーとマレーシア、東南アジア諸国の歴史や文化などを学び、大学の教授や様々な企業の方から講義をしていただきました。

海外研修は7泊8日あり、ミャンマーでは、オイスカ研修センターの研修生と交流する機会がありました。研修生達は、日本語をよく勉強しており、私たちの質問を理解し、しっかりとした回答を返してくれることに大変驚きました。オイスカで学んでいる研修生は、日本で農業を学び、得た知識で村の発展に貢献することや独立して農業をするなどの大きな目標を持っていました。また、普段の生活について、男性はチンロンというサッカーに似ている遊びを、女性はスマートフォンで音楽を聴いたり、ダンスを見て踊ったりしているということを知り、国は違うけど普段の生活は一緒だと感じました。

また、渡航経験について聞いたところ、研修生のほとんどが海外に行ったことがない方ばかりでした。研修で日本には行く予定だが、大きな都市である東京、大阪ぐらいしか知らないとのことだったので、自分たちの住んでいる福岡をもっと知ってもらうためにどうしたらいいのか、再度考えさせられました。

次に、マレーシアの華人系小学校を訪問した際、1年生から英語の授業があること、先生の質問や回答がすべて英語だったことに、日本より英語教育が進んでいると感じ、驚きました。また、日本では、英語の授業はあるが、なかなか自分から話さない、失敗したらどうしようという不安で喋れない子どもが多くいます。しかし、華人系小学校の生徒達は堂々と英語を話していたので、私たち日本人も失敗を恐れず、上手く話せなくてもいいので、どんどん英語を使っていかなければならないと感じました。

今回の研修を終えて、英語を話せない私は、英語を話せるようになることが課題だと思いました。英語が分かることによって、会話が増え、福岡を訪れる外国人に良いところを伝えることができます。今回の研修が無駄にならないように、積極的に取り組んでいきたいです。

また、この研修に参加させてくれた会社、そして講義をしていただいた各企業の方々に感謝しています。ありがとうございました。

Global Wings 2019 Group 3

人生、日々勉強!!

鳥江　徳子
株式会社ヨシックス

私は、今まで英語にしても、文化の違いにしても、自分が海外へ出なければあまり関係がないと思っていた。しかし、そんな考えを知人に話したところ、「近い将来、外国人が日本にも増え、海外に出なくても言葉や文化、考え方の違いを身近に感じることがきっと増えてくる」と言われた。また、「海外に出て、初めて自分の住んでいるところの良さや、変わらないといけないところが見えてくる」とも言われた。

そのようなアドバイスをくれた知人に教えてもらったのが、今回参加した福岡県グローバル青年の翼だった。

私は、海外研修の訪問先であるミャンマーとマレーシアについてほとんど知らなかった。しかし、事前研修で、日本との歴史や訪問先の経済事情、文化などいろいろな講義を受け、分からないことや気になることについては、積極的に質問し、学び、多くの知識を身につけて海外研修に臨むことができた。

実際に現地を訪れて最初に感じたことは、海外のダイナミックさである。日本は、良い意味でも悪い意味でも型にはまりすぎていると感じた。また、現地で活躍されている日本人の方々から話を聞く機会が多くあったが、共通して言われていたことがある。それは、「相手を知ること」と「知って、相手を尊重すること」である。この話を聞いて、一人ひとり違う考えや価値観を持っているなか、私はきちんと相手の立場になって物事を考えられているだろうかと思案したとき、正直自信が無かった。もっと柔軟な考えを持ち、相手の気持ちを考えられるようになりたいと思った。

また、海外研修を通して、ネットなどから情報を得ても、実際に行ってみないと分からないことばかりで、自分の目で見て、体験することがどんなに大切かを知った。そして、今までの人生の中のわずか一週間で、私の中の価値観がガラリと変わった。まだまだ知らないことばかりで、勉強には終わりがなく、これからの人生がもっと楽しみだと思った。

研修を通して、団員みんな同じものを見てきたが、一人ひとりが感じたこと、思ったことは違うと思う。しかし、この貴重な経験が、これからの人生の原動力となるのは、参加したみんなが同じように感じていることだと思う。今回の研修をきっかけにし、これからいろいろなことに挑戦し続け、なりたい自分へと成長して行きたいと思う。

Global Wings 2019 Group 3

2カ国から学ぶ教育のあり方

原田　群士
北九州市立大学

私は将来、教育の道に進もうと考えている。そのため、この研修を通じて、ミャンマーの教育現場の現状や英語を教える立場に立つ者としての心構え、そして、教員としてどう異文化と向き合うかの3つを深く学びたいと考え、研修に臨んだ。

ミャンマーでは、僧院学校を訪問し、教育現場を視察した。私は、ミャンマーの教育について調べる中で、暗記中心型授業を問題と捉える記事や論文を目にしていた。しかし、小学3年生の英語の教科書には、自由英作文や写真描写のページもあり、暗記型授業が少しずつ改善していると感じた。また、英語教育に関して、彼らは日本人が中学校で学ぶ英文法を学んでおり、思わぬところで日本との英語力の差を痛感させられた。しかし、小中高の教育カリキュラムが10年と日本と比べ短いせいか、英語が話せても、何を話すかが欠如している学生が増えていることを知った。このことから、英語はあくまでも国際的に活躍するための手段であり、目的ではないことを再認識した。何のために英語を学ぶのかを忘れてはいけないと思い知らされた学校訪問だった。

マレーシアでは、華人系小学校を訪問し、コミュニケーションツールとしての外国語を教える教員としての心構えを学んだ。日本の英語教員の大半が、自身の英語力に自信がないと言われている。しかし、マレーシアの先生方は英語を積極的に用いて、自信を持って授業をしていた。なにより興味深かったのは、彼らは自身の英語力を決して完璧だとは思ってないということだ。それでも話すことの大切さを伝えるべく、自信をもって話していると、一人の英語の先生が伝えてくれた。この心構えは外国語を教える日本人教員が見習うべきところだと感じた。

また、ミャンマーの縫製工場の視察を通じて、異文化とどう向き合うかのヒントを得た。工場創業者の玉崎さんは、ミャンマーの人と付き合う際、「彼らの行動の理由を聞くことが大事」だと教えてくれた。例えば、従業員が目上の人に自ら挨拶しないことは日本人からすると失礼である。しかし、ミャンマーでは、目上の人を敬い、自ら声をかけることは恐れ多いという考えを持っている。この考えを聞くと、その行動に納得できるということだった。ここから、世界には自分が思ってもみない発想や考えがあり、それは国際化する教育の中でも言えることに気がついた。そして、人間関係を構築する際には、自分の偏った常識に縛られず、相手の考えを聞くことが大切であると感じた。

今回研修で学べたことは、私に取って非常に価値があり、この経験を武器に自分の将来を切り開いていきたい。

Global Wings 2019
Group 3

強い意志を持ち、挑戦する大切さ

宮本　麻希
九州大学

私は、将来医療従事者になる者として、日本だけではなく海外の状況を把握する能力を養いたいと思い、この研修に参加した。そして研修を終え、参加してよかったと心から思える。

事前の国内研修で、アジアの発展状況や文化について講義を受けていたが，実際にミャンマーとマレーシアを訪問し、現地の生活を目の当たりにすることで、多くの新しい発見があった。発展が進む都市部やまだまだ整備が足りていない農村部の様子を間近で見られたことは、私にとって貴重な体験となった。

また、ミャンマーでは、オイスカ研修センターの研修生やJ-SAT Academyの生徒と交流する機会があった。Academyの生徒で、熊本での研修が決まっている方が言われた「日本で技術や知識を身につけ、国全体は難しくとも、地元だけでも発展に貢献したい」という言葉に感銘を受けた。慣れない土地、言語に臆することなく、自分の能力を地元に還元したいという強い思いが伝わった。将来どんなことをして社会に貢献したいのか自分に問うきっかけになったと同時に、難しい挑戦に対して、行動を起こす前から諦めてはならないと改めて考えた。

海外研修を通して、多民族国家のマレーシアでは国民同士が違いを認め合いながら、国を成立させている印象を受けた。華人系小学校では、異なる民族の子どもたちが同じ教室で授業を受ける姿が興味深かった。幼いころから宗教や文化の違いに触れることで、多民族の交流が日常となる。日本での生活では、多様性に満ちた異文化の生活に触れるのは難しい。だからこそ、今回海外を訪れて感じたことを伝えていくことも私たちの使命であると思った。

将来につながる学びも多くあった。ミャンマーでは、地域によっては診てくれる医者がいないため、遠くの大きい病院まで出かけなければならないらしい。一方、マレーシアの病院での骨折治療を日本の医者に診てもらったところ、治りの良さに驚かれるほどマレーシアの医療は発展しているそうだ。よく、経済発展での地域格差を耳にするが、医療の面においても格差は存在する。だからこそ、地域で求められているものは異なると実感した。私自身が海外の医療状況を把握できていなかったように、実際に訪れてみなければ、その国で必要なものは分からない。今後、日本と海外とで、医療技術を活用しあう機会がますます増えていくと考える。そのような国際協力に携わる人材になれるよう、学びを活かし、挑戦し続けたい。

Global Wings of Fukuoka Youth

事務局から一言

半年間の研修を終えて

福岡県青少年育成課　吉田　豊啓

事務局（吉田）

国際的な視野を備え、地域で活躍する青年リーダーを育成する一。その大きな目的のもとに「第4回福岡県グローバル青年の翼（Global Wing 2019）を9月から3月までの半年間にわたり実施しました。この事業は、前身の事業から数えて49年目となる長い歴史を持つ事業です。時代の流れと共に内容を少しずつ変えながら、これまで多くの団員が参加し、今年も20名の団員が参加しました。この歴史の中に私自身も担当として携われたことは大変光栄でした。

また、彼らのために国内、海外の研修で貴重な講義をしていただいた講師の皆さま、フィールドワークにご協力をいただきました皆さま、視察を快く引き受けていただいた皆さま、そして、この事業を様々な形でご支援をいただきました皆さま、本当にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。是非、今後の彼らの成長を温かく見守っていただければと願っております。

そして、20名の団員の皆さん、半年間にも及ぶ長い研修の間、よく頑張ってくれました。国内研修では、様々な講義とグループワークがありました。また、海外研修では、連日早朝から深夜まで多くの視察や交流会を行いましたが、それら全てにおいて、みなさんはチームとして果敢に挑んでくれました。長い人生のわずか半年間ですが、大きく成長されたのではないでしょうか。

今年の海外研修先は、ミャンマーとマレーシアの2カ国でした。世界に多くある国の中でたった2カ国、1週間程の訪問でしたが、これまでの人生の中でも大変貴重な経験ができた1週間になったことと思います。

それぞれの訪問地については、事前にインターネットやテレビなどを通じて、情報を目にしたことがあったかと思います。しかし、実際に訪問して感じた空気や景色、現地の方との交流を通して感じた考え方の違いなどは、自身の想像を上回る体験だったのではないでしょうか？

私自身、今回のように濃密なスケジュールのもとで海外を訪問するのは初めての事であり、毎日が驚きと感動の連続でした。海外に行くと、日本とは違う価値観や新しい経験に遭遇します。こうした経験が、自分の思考に幅を持たせ、さらなる成長につながるものになると確信しています。

私は、自分の知らない文化やルール、考え方が世の中には多くあり、その環境で生活する人がいることを認識することは、研修テーマの一つである、「国際的な視野を持つ」に繋がるとても大切なことだと考えています。

団員のみなさんも、これからも視野を広く、何事にも好奇心を持ってチャレンジし続けてください。そして、自身の活動される場でご活躍いただきたいと思います。

第4回　福岡県グローバル青年の翼（2019）グローバル＆ローカル・リーダーシップ・プログラム

募　集　要　項

1. 目　　的

県内青年に、世界（アジア）を舞台に県内の企業や自治体が活躍している現状を体感、認識させることで、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核的存在として地域で活躍できる人材を育成する。

2. 主　　催

福岡県グローバル青年の翼実行委員会（以下「実行委員会」という）

3. 事業内容

（1）募集人員　24名

（2）全体の研修スケジュール

① **第１次研修（宿泊）**…９月７日（土）～８日（日）
郷土の歴史・県内企業の海外展開・国際協力活動・県の施策等についての講義等

② **第２次研修（フィールドワーク）**…①と③の間の任意の日
海外訪問先に関連する県内企業・団体等の視察

③ **第３次研修（宿泊）**…10月19日（土）～20日（日）
訪問国及び訪問先に関する講義・海外視察先選定・英語スピーチ指導等

④ **第４次研修（海外研修）**…11月３日（日）～10日（日）
現地企業や産業インフラ、NPO法人、多民族融和（ムスリム政策）・文化施設の視察・体験、現地で活躍する日本人などとの交流等

⑤ **第５次研修（宿泊）**…12月７日（土）～８日（日）
海外研修レビュー・NPO法人活動講義・事後フィールドワーク企画等

⑥ **第６次研修（フィールドワーク）**…⑤と⑦の間の任意の日
これまでの研修を受けての県内フィールドワーク

⑦ **報告会**…３月中のいずれかの日曜日（予定）
研修成果報告会
※研修日程については、研修効果を高めるため変更になる場合があります。

（3）海外研修

日　時　令和元年11月3日（日）～10日（日）　7泊8日
訪問先　マレーシア（クアラルンプール）、ミャンマー（ヤンゴン・バガン・パコック）
※訪問国（都市）は、変更になる場合があります。

※ 海外研修の内容について

①目　　的

産業・ビジネス・文化・社会貢献活動等の分野で、発展し続けるアジアの現状を体感するとともに、福岡（日本）が海外に打って出る姿を学ぶことにより、国際的視野を身につけ異文化交流について理解を深める。

②研修内容

・現地企業や産業インフラ、企業、多民族融和（ムスリム政策）・文化施設、社会貢献活動視察、現地で活躍する方との交流会等。
例：都市計画・インフラ・工業施設・現地企業の視察・訪問、多民族融和（ムスリム政策）・文化施設等の視察、日本や現地NPOの社会貢献活動の視察・体験、夕食交流会の開催

4. 募　　集

（1）募集人員　24名

（2）募集締切　令和元年６月27日（木）

（3）応募資格　（①～④のすべてに該当する者）

① 県内居住者で、平成31年４月１日現在、満18歳～35歳の者

② 企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属・在籍するもので、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核となって活躍する人材を目指す者

③ 過去２年間（平成29年度以降）のうちに国・地方公共団体等の公的経費（一部助成を含む）によって海外派遣事業に参加した経験のある者、国又は地方公共団体の議会の議員の職にある者は除く。

④ 健康状態等
・健康で協調性に富み、研修計画に従い海外研修等の活動が支障なくできるとともに、規律ある団体生活に耐えられる者。
・第1次研修から報告会までの全てのプログラムに参加できる者

5. 応募方法

下記の書類をとりそろえ、6月27日（木）までに実行委員会事務局へ直接申し込むものとする。郵送可（当日消印有効）。住所は「10.問い合わせ先」参照のこと。

① **参加申込書**…様式１

② **返信用封筒**（定形郵便のサイズで、住所、氏名を明記の上82円切手を貼付）

③ **推薦書**…様式２
（参加者の所属する団体内の関係者による推薦とする。ただし、参加者の親族や友人による推薦は認めない。）

④ **勤務先所属長の承諾書（ただし、被雇用者のみ）**…様式３

⑤ **作文**
・この研修で何を学びたいか、研修後、成果をどのように活かしたいかなどを具体的に記述すること。
・パソコン、ワープロを使用し、1,200字程度にまとめること。
・縦Ａ４判横書きとし、タイトル及び氏名を明記すること（タイトルは自由）

⑥ **保護者の同意書（ただし４月１日現在で20歳未満の者のみ）**…様式４

※上記データは、福岡県庁ウェブサイトよりダウンロード可能です。
「福岡県グローバル青年の翼」にて検索ください。

6. 団員候補者の選考、決定

（1）団員候補者の選考

実行委員会において、第1次選考（書類選考）を行い、結果を7月上旬までに本人に通知する。

書類選考の合格者については、７月7日（日）（予定）に第２次選考（面接）を実施し、８月初旬までに内定者を決定し本人に通知する。

（2）団員の決定

団員の決定は、第３次研修まですべて出席し、かつ団員としてふさわしいと認められる者について第３次研修修了時に行う。

※不適当と思われる者については、それ以後の研修参加を認めない。

7. 経費・被害等の負担

（1）次に掲げる経費のついては、個人負担とする。

負担金	その他の個人負担経費
社会人 120,000円	県内研修に係る経費（交通費、食事代、宿泊費）、パスポート取得に係る費用、旅行傷害保険料、海外研修に係る経費（県内旅費、一部の食事代・交通費等）
学生 100,000円	

（2）負担金は、10月に実施予定の第３次研修前までに納入するものとし、納入後は原則として返金しない。なお、負担金納入の有無にかかわらず、団員が自己の都合により辞退した場合に生じるキャンセル料等については、本人が全額を負担するものとする。

（3）研修中の災害、病気、事故、個人の不注意等で主催者の責めに帰さない理由によって生ずる団員の損害等については、主催者は責任を負わないものとする。

8. 団員資格の取消し

（1）団員として不適切と認められる者（研修の無断欠席、悪意を持って研修活動を妨害する者など）については、団員資格を取り消すものとする。また、海外研修中における資格の取消しは団長が行い、速やかに帰国させるものとする。

（2）海外研修中に団員の資格を取り消した場合における帰国に要する経費は、取り消された者の負担とする。

（3）上記二項のいずれかに該当した場合、すでに実行委員会が負担した経費の一部または全部を取り消された者から返還させることができる。

9. 事後活動

当事業に参加した団員は、これまでの事業参加者で組織している「福岡県青年の会」に入会し、積極的に会の活動に関わっていくことが求められる。

問い合わせ先
福岡県グローバル青年の翼実行委員会事務局
〒812-8577　福岡市博多区東公園7番7号
福岡県 人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局 青少年育成課内　電話 092-643-3387

Special Thanks to

国内研修の講義・視察などでお世話になった皆様

研修	氏　名	所　　属	
第1次研修	原　　知輝 様	日本貿易振興機構（JETRO）	アジア大洋州課
	田中　克明 様	田中藍株式会社	取締役　専務
	占部　賢志 様	中村学園大学	教育学部　教授
	豊島　　茂 様	公益社団法人　福岡県観光連盟	観光推進プロデューサー
	神田橋幸治 様	ビジネスデザインラボ	代表
	徳丸　純一 様	グローバルイノベーション事業協同組合	専務理事
	中村　芳生 様	中村学園大学	流通科学部　准教授
第2次研修	西山健太郎 様	公益財団法人　福岡観光コンベンションビューロー	マーケティングマネージャー
	森　　俊宏 様	公益財団法人　福岡観光コンベンションビューロー	観光事業部観光戦略課　観光戦略係長
	上原　昌也 様	極味や西新店	店長
	池田　彰治 様	福岡市立那珂小学校	校長
	仮屋　博昭 様	株式会社ミカサ	本社　次長
第3次研修	長根　寿陽 様	西田精麦株式会社	新規事業推進室　室長
	藤井　啓介 様	公益財団法人　オイスカ	海外開発協力担当課長
	篠崎　香織 様	北九州市立大学	外国語学部国際関係学科　教授
	Aldo Bloise 様	IT & IP Strategy Advisory	Deputy General Manager
	Joelle Bloise 様	IT & IP Strategy Advisory	General Manager
	水谷みずほ 様	合同会社みずトランスコーポレーション	代表取締役　社長
	花野　博昭 様	合同会社みずトランスコーポレーション	代表取締役　副社長
第5次研修	Rochelle Kopp 様	JAPAN INTERCULTURAL CONSULTING	社長
	香月栄史朗 様	GBASIA協同組合	監理責任者
	たいら由以子 様	特定非営利活動法人 循環生活研究所	理事
第6次研修	西山健太郎 様	公益財団法人　福岡観光コンベンションビューロー	マーケティングマネージャー
	森　　俊宏 様	公益財団法人　福岡観光コンベンションビューロー	観光事業部観光戦略課　観光戦略係長
	豊島　　茂 様	公益社団法人　福岡県観光連盟	観光推進プロデューサー
	廣瀬　兼明 様	公益財団法人　オイスカ西日本研修センター	所長
	彦坂　延良 様	公益財団法人　オイスカ西日本研修センター	研修課長
	園田すみれ 様	公益財団法人　オイスカ西日本研修センター	研修担当

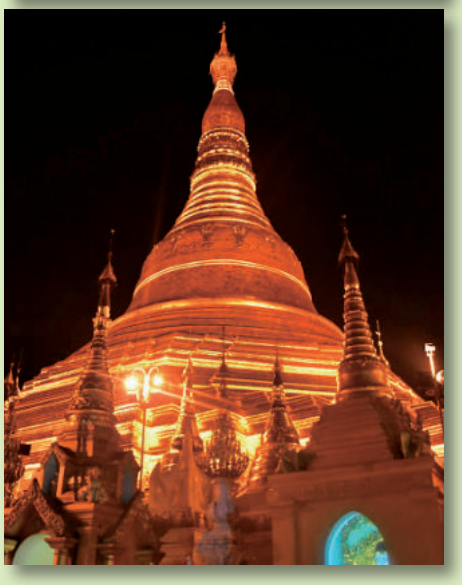
海外研修の視察・交流会などでお世話になった皆様

氏　名	所　　属	
小杉　辰雄 様	オイスカ研修センター（DOA OISCA Intarnational）	ミャンマー駐在代表
西垣　　充 様	株式会社ジェイサット（Japan SAT Consulting）	代表
玉崎　浩之 様	ブレッシング縫製工業会社（Blessing Intertrade Co.,Ltd,）	
野田　勝也 様	ミャンマー福岡県人会	
魏官云(Ngoi Kwang Hong)　様	SJK（C）Kepong1	校長
松田　　史 様	マレーシアヤクルト	Senior Manager
陳　　素珊 様	Apple Vacation	
柳瀬　　隆 様	双日リテールマネジメント株式会社	Managing Director
W.Y.LIM　様	L&L CONSULTANT	Funder & Director
小山　真一 様	マレーシア福岡県人会	
オイスカ研修センターのみなさま		
株式会社ジェイサットのみなさま		
ミャンマー福岡県人会のみなさま		
ヤンゴンの夕食交流会にご参加いただきましたみなさま		
SJK（C）Kepong1教員、生徒のみなさま		
マレーシアヤクルトのみなさま		
マレーシア福岡県人会のみなさま		

福岡県グローバル青年の翼にご協力をいただきました全てのみなさま、

団員一同、心より厚く、熱く御礼申し上げます。

Snapshots with Message



1班　Snapshots with Message

伊藤　雄太　Profile　P30

国境を越えてきた見知らぬ僕らを手厚く
歓迎してくれた村の人たち。
言葉は通じなくても終始素敵な笑顔で
対応してくれました！

梅野　莉子　Profile　P30

農業体験後の休憩時間でパン屋の庭にあった
ブランコに乗ってるところを写真にパチリ。
写真を見てみると…謎の虹が出現！！！
題名　「虹の向こうへ　レッツゴー！」

久保田　篤　Profile　P31

オイスカ研修センター近くの村の小学校にて。
子供たちの笑顔にパワーをもらう！
笑顔は万国共通のコミュニケーションツール！

坂口　至　Profile　P31

バガンの寺院でくつろぐ野良犬。
ミャンマーでは動物たちにエサを与える行為は徳を積む行為とされ、日常的に行われている。このためかどの犬もとても人懐こかった。

立石　知里　Profile　P32

きれいにデザインされたプトラジャヤのアルファベットオブジェ。ミャンマーもマレーシアも素敵な思い出の地になりました。
いつかまた行きたいなー！

平野　佑花　Profile　P32

ミャンマーのオイスカ研修センターにて、現地の研修生に「タナカ」を塗ってもらっている一枚。「タナカ」とは、化粧品や日焼け止めとして、「タナカ」という樹木をすりつぶして顔や腕に塗って使います。本当に肌がすべすべになった気がしました！

2班　Snapshots with Message

新谷　文都　Profile　P33

ミャンマーの民族衣装であるロンジーを
初めて身に着けた時の一枚！！
着方がわからず苦労したが、風通しが
よく、クセになりそう！

大屋　歩夢　Profile　P33

ミャンマー、オイスカ研修センターでの写真。
親豚の乳を一生懸命に吸う子豚がめっちゃ
可愛かった！

織田　孝徳　Profile　P34

現代の日本では味わえないミャンマーの
街並みを見学。
日本からミャンマー発展に貢献出来ればと
感じた。

田代　公貴　Profile　P34

ムルデカ広場での一枚です。
このような絶好の機会でシャッターを切らせてもらえるなんて、カメラマン冥利に尽きます。
一番左の久保田さんが無表情なのは、この写真の直前に私が「久保田さんだけ跳んでません」と言ってしまったせいだと思います。
ごめんなさい久保田さん（笑）

田中　佳倫　Profile　P35

ヤンゴンの夜に黄金に輝くシュエダゴン・パゴダ。生まれた曜日を大事にするミャンマーで私たちも生まれた曜日のコーナーで参拝。

永田　佑衣　Profile　P35

ムルデカ広場での１枚。
きれいな青空のもと、みんなで楽しくおしゃべり。
この縁はこれからもずっと大事にしていきたい！

3班　Snapshots with Message

有吉　美月　Profile　P36

OISCA研修センターでの1枚。
子どもたちの笑顔が可愛くて癒されました！

石井　敬　Profile　P37

ヤンゴン空港にて、バガン行きのプロペラ機へ搭乗するときの風景
ヤンゴンは大雨であったが、ミャンマー人が、傘をさしてプロペラ機まで案内してくださり、日本には無いミャンマー人の気遣いや心の温かさに触れ、感動した。

鎌田　拓　Profile　P37

安くて勢いで買ったサングラス
歴代やってるらしい。恥ずかしい。

佐々木　大介　Profile　P38

オイスカ研修センターにて、チンロンというスポーツで研修生達と競い合った時の一枚
サッカーボールより小さくてボールコントロールが難しかったけど、いい汗かきました！

鳥江　徳子　Profile　P38

キャリーバッグの鍵を持ってくるのを忘れてしまい、バッグが開かないようバゲージラッピング！！だけど、ラッピングがなかなか取れずに苦戦。
４人がかりで外しました。団員といれば、何でも楽しく感じるね。

原田　群士　Profile　P39

蚊帳の中で一晩を過ごす貴重な体験！
ゴキブリは死んでたけど、とてもぐっすり寝れました！

宮本　麻希　Profile　P39

ミャンマーで飲んだ果肉たっぷりパイナップルジュースです＾＾
海外のフレッシュジュースは、果物が搾りたてなのに日本より値段が安くて、とってもおいしくて、最高でした！！

MEMO